

弟子そのあり方

ウィリアム・マクドナルド 著
C. L. C. 暮しの光社編集部 訳

クリスチャン生活のための本

カルバリーの道	ロイ・ヘッション著	560円
千代に至る祝福	滝元 明著	270円
敬虔な生涯	ブラザー・ローレンス著	500円
聖霊体験への道	サムエル・チャドウィック著	650円

キリスト者の生活指針	尾山令仁著	600円
信仰生活のガイドブック	古林三樹也著	150円
奉仕者の生活術ノート	古林三樹也著	580円

弟子 そのあり方 定価 400円

1980年4月11日 初版発行 ©CLC. 1980

著者 ウィリアム・マクドナルド

訳者 CLC暮しの光社編集部

印刷 新 生 運 動

発行 CLC暮しの光社

〒180-03

東久留米市本町 4-13-34

電話 <0424> 71-1527

落丁乱丁の際はお取替いたします。

(配給 デンパン)

Printed in Japan

目次

はしがき	
はじめに	5
一 弟子たることの条件	7
二 すべてを捨てる	16
三 弟子への道を妨げるもの	29
四 弟子と管理人	37
五 情熱	45
六 信仰	55
七 祈り	64
八 戦い	74
九 世界を治めること	84
十 弟子たることと結婚	96
十一 犠牲を計算に入れる	103
十二 殉教の覚悟	110
十三 ほんとうの弟子への報い	115

はじめに

真の弟子としての歩みは、人が新しく生まれた時に始まります。つまり、以下にあげる事柄がまず経験されてからです。

- 一、神の前に罪深く、失われ、盲目であり裸であることを認識する。
- 二、善良さや善行によつては自分は救われないことを認める。
- 三、主イエス・キリストが十字架上で自分の身代わりとして死なれたことを信じる。
- 四、はつきりと信仰によつてイエス・キリストを自分の救い主として受け入れ、彼にだけ従っていく決心をする。

これはクリスチャンになる方法を述べたにすぎません。しかし、このことをまず強調しておく必要があります。なぜなら、多くの人たちが、クリスチャン生活をすればクリスチャンになれると思つているからなのです。決してそんなことはありません。クリスチャン生活をするまえに、まずクリスチャンにならなければならぬのです。

さて、本書でひととおりに述べられる弟子としての生活は超自然的なものです。私たちのうち

にはそんな生活をする力などありません。ただ新しく生まれた時に、イエス・キリストの教えられたように生きる力が与えられるのです。

さあ、本論に入るまえに、自問してみてください。「私はほんとうに新しく生まれたのだろうか。主イエスを信じて、神の子どもとなっているだろうか。」

もし、そうならないならば、いま、イエスを自分の主、自分の救い主として受け入れてください。そして、彼が命じられたことすべてに、どんな犠牲を払わねばならなくなっても従う決心をしてください。

ウイリアム・マクドナルド

一、弟子たることの条件

真のキリスト教とは、主イエス・キリストに対する全面的な献身を意味します。救い主は、暇な晩とか、週末とか、定年後の生涯を献げようとする追従者を求めてはおりません。むしろ、自分の全生活の中で主のことを最優先する者たちを求めておられるのです。

「主が、いままでと同様、いまもさがし求めておられるのは、ご自分の後に目的もなく押し流されてくる群衆ではなく、あくまでも忠実に従ってくる一人一人——彼ら自身の前を歩まれる主の自己否定のその道を歩む用意のある人々を主が求めておられることを知っているそのような人々——である。」

H・A・ホプキンス
無条件降伏以外の何物もカルバリーでの主の犠牲に対する十分な応答とはなりえません。かくも驚くばかりの、かくも神聖な愛は、我々の魂、我々の生涯、我々の全存在以下のもので決して満足しえないのです。

主イエスはご自分の弟子となる者に対して、厳しい要求をなさいました。この要求はぜいたくな暮らしをしている今日では全く見過ごされています。あまりにもしばしば、私たちはキリス

ト教は、地獄行きを免かれさせるもの、天国へ行く保証をするものとみなしています。そのうえ、この地上の生活から受けるべき良きものを十分楽しむ権利を有していると考えています。聖書の中には弟子たることに對する強い言葉があるのを私たちは知ってはいても、それを、私たちがキリスト教はこうあるべきだとする考え方とどう調和させていくか、困ってしまうのです。

私たちは、だれひとり兵士が愛国心のゆえに自分の命を献げることには反対はしません。また共産主義者が、政治的理由によって自分の生涯をかけることをおかしいなどとは思いません。しかし、キリストに従う者の生涯も「血を流すまで戦うものである」などは、なぜか雲をつかむような話にすら私たちには感じられるのです。

けれども、主イエスの言葉は明らかです。額面通り受け取るならば、誤解する余地はほとんどありません。これから、世界を救う方が課せられた弟子たる者の条件をあげてみましょう。

(一) イエス・キリストに對する最上の愛

「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができます。」(ルカ一四・二六)

これは私たちが家族に對して憎しみとか悪意を抱かねばならないと言っているではありません。むしろ、キリストに對する愛があまりにも大きすぎるので、他の家族に對する愛などは比べてみれば憎しみに等しくなってしまうのです。實際右の節で一番難しい句は「そのうえ自分のいのちまでも」という表現でしょう。自己愛は弟子になるのにしつこくつきまとう邪魔も望みたくもなることはできないのです。主の前に献げることができなければ、私たちは、主が

(二) 自分を捨てる

「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て……」(マタイ一六・二四)

自分を捨てるというのは、自分を犠牲にすることと同じではありません。後者はある食べ物とか楽しみとか財産などを投げ出すという意味になるのに對して、自己を捨てるとは、自分は何の権利も権力もないという程にキリストの主權に完全に屈服することを意味します。自己がその王座をキリストに明渡すことなのです。この考え方はヘンリー・マーチンにも見られます。

「主よ。我が意志を捨てさせてください。自分にとって真の幸福がいかなるとも、外面的に起つて来る事柄に頼ることにあるのではなく、あなたの意志に一致していくことにあるのだと思ふようにならせてください。」

10

(三) 真剣に十字架を選びとる

「だれでもわたしについて来たいと思ふなら、自分を捨て、自分の十字架を負い……」(マタイ一六・二四)

この十字架とは肉体的弱さとか、精神的苦痛を指してはいません。こんなことは誰にもありふれたことなのです。十字架とは、真剣に選びとられた道のことです。それは「この世にある限り、非難を浴びる屈辱の道」(C・A・コーツ)です。十字架は世界が神の御子に浴びせかけた、また流れに抗して立ち上がる者に浴びせかける侮辱と迫害と虐待を象徴しています。しかし信者であってもこの世とその行き方に同化するならば、こんな十字架は負わなくてもすむはずです。

(四) キリストに従う生活

「だれでもわたしについて来たいと思ふなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」(マタイ一六・二四)

これがどんな意味をもっているか知るために、自問してみる必要があります。「主イエスの生涯には、どんな特徴があるか。」それは、神の意志に対する服従の生涯でした。聖霊の力によって生かされた生涯でした。他の人々に対して無私になって仕える生涯でした。はなはだしい不正に直面して、忍び通された生涯でした。情熱、犠牲、自制、柔和、親切、誠実、献身、(ガラテヤ五・二二、二三)の生涯でした。主の弟子となるためには、主が歩まれたように私たちも歩まなければなりません。そしてキリストに似た者になるといふ実を見せなければなりません。(ヨハネ一五・八)

(五) キリストにある者への熱烈な愛

「もしあなたがたの互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であるこ

とき、すべての人が認めるのです。」(ヨハネ一三・三五)

これは自分よりも他の人を優れた者とみる愛です。多くの罪をおおう愛であり、寛容で親切な愛です。それは自慢したり高慢になりません。非礼を行わず、自分の利益を求めず、すぐに怒らず、悪を思いません。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。(第一コリント二三・四―七)もしこのよような愛を欠くならば、弟子というのは冷たい、律法的な禁欲生活になってしまうでしょう。

(六) キリストの言葉にとどまる

「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。」(ヨハネ八・三一)

ほんとうの弟子には最後まで忠実であることがどうしても必要です。三日坊主や、感情のたもとえようもない高まりによってスタート・ダッシュすることはとても簡単なことです。ほんものかにせものかを判定するには、最後まで持ちこたえるかどうかです。だれでも手を鋤につけ

てからうしろを見る者は、神の国にふさわしくないので。 (ルカ九・六二) ある時だけ急にみ言葉に従うのはうまく行かないでしょう。キリストはつぶやかずにたえずご自分に服従する者を求めておられるのです。

(七) すべてを捨てて従う

「そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。」(ルカ一四・三三)

これが、たぶんキリストの弟子に対する条件の中でもっとも人気のないものでしょう。聖書の中でも一番受けの悪い個所となるのかも知れませんが、賢い神学者はこの句はそのような意味にとるべきではないと、多くの理由を述べる事ができます。ところが、素朴な弟子ならば、主イエスはご自分の考えのとおりのことを語っておられると理解し、喜んでこの句をそのまま受け入れるはず。では、全部を捨てるというのはどういう意味なのでしょう。それは、生活のために絶対必要ということもなく、福音を広めるために用いることができる物的財産はすべて捨てるということを意味しています。すべてを捨てた人は、不精な怠け者になることはあ

りません。額に汗して働き、自分と家族の生計を立てます。しかしその人の情熱は、キリストの目的を前進させることにありますから、現在の必要以上のものはすべて、主の事業に投資して、将来のことは神に委ねます。神の国と神の義とを第一に求める時、衣食に事欠いて困るというのではないと彼は信じているのです。福音を知らずに滅びていく魂があるのに、たくわえを増やすことを続けることなどその良心が許さないので。またキリストがご自分の聖徒たちのために再臨されれば、サタンとともに過ぎ去る富などを集めるのに自分の人生を台なしにしてしまいたくはないし、また主が地上に富をたくわえることに対してなした警告に従うことを望むのです。すべてを捨てるにあたって、その人はどのみち、持ち続けることのできないもの、もう愛着を感じないものを献げることになるのです。

* * * * *
これまで、キリストの弟子たることの条件を七つあげてきました。単純明解なことばかりです。筆者はこれらの条件をあげることによって、自らを役立たずのしもべだと糾弾してしまつたことを覚えます。しかし、神の真理はいつまでも神の民の敗北によって押しやられてしまつてよいでしょうか。メッセージを語る人がどうであれ、メッセージの内容が大切なことを言っているのかわりはありません。

私たちは過去の失敗を告白して、勇気をもってキリストが私たちに与えられた言に真正面からぶつかり、そこから我らの栄光ある主のほんとうの弟子たらんことを切に求める者となりましょう。

二、すべてを捨てる

「そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。」(ルカ一四・三三)

主イエスの弟子となるために、人はすべてを捨てなければなりません。これは救い主の誤りようもない意味なのです。たとい私たちがこんな「極端」な要求にどんなに反対したとしてもまた、こんな「不可能」な「愚か」な方針に対してどんなに反抗したとしても、これが主の言葉であり、主はご自身が語る言葉、そのとおりのことを言っておられるという事実はくつがえしようもないのです。

はじめに、私たちは以下に掲げる曲げることのできない真理に面と向い合うべきです。

イ イエスさまはこの要求を持定の選ばれたクリスチャンの働き人に対してされたではありません。イエスは言われました。

「あなたがたはだれでも……。」

ロ 単に喜んですべてを捨てたいと思う、ただでいいとは言っていません。

「あなたがたはだれでも、自分の財産を捨てないでは……。」

ハ 私たちの財産の一部だけを捨てればよいとは言っていません。「あなたがたはだれでも自分の財産全部を捨てないでは……。」

ニ 自分の財産にしがみついている者がなお弟子でいられる程、薄められた弟子の道があると言っておられません。

「……わたしの弟子になることはできません。」

実際、この絶対的要求が聖書の他の箇所には見られないかのようはこの勧めに私たちは驚くべきではありません。イエスさまはこう言われたのではないのでしょうか。

「自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、必ず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。自分の宝は天にたくわえなさい……。」(マタイ六・一九)

「地上に宝をたくわえるのは、我らの主によって姦淫や殺人と同様に明白に禁じられていることである」とウェスレーがいみじくも言いあてたように、イエスさまはこうも言われたのではないのでしょうか。

「持ち物を売って、施しをしなさい……。」(ルカ二一・三三)

また、イエスさまは若い金持ちの役人に向かってこう教えられたのではないのでしょうか。

「……あなたの持ち物を全部売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすればあなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」(ルカ一八・二三)もし、主が語られたとおりのことを言われたのではないとしたら、一体、何を言わんとしていたのでしょうか。

初代教会の信者たちが、「資産や持ち物を売っては、それぞれの必要に応じて、みなに分配していた。」(使徒二・四五)のはほんとうではないのでしょうか。

また、のちの神の聖徒たちが、文字通り、すべてを投げうってイエスに従ったのも、真実ではないのでしょうか。

バグダッドへの初期の宣教師であるアントニー・ノリス・グロープス夫妻は次のような確信を持ちました。「自分たちは地上に宝をたくわえるのをやめなければならぬ。自分たちの多額の収入をそっくり主のみわざのために献げるべきだ。」

C・T・スタッドは「自分の全財産をキリストに献げ、あの若い役人が失敗したことを成し遂げようと自分に与えられたこの黄金の機会を逃がすまいと決心した。……それは、神の

言葉に対して、たやすいことでも辛いことでも、卒直に従うことであつた。」

彼は主の働きのため、莫大なお金を分配したうえ、自分の結婚費用にその一部だけを取っておきました。花嫁はこれでもう十分とは思わなかつたのでこう聞きました。

「チャーリー、主は若い役人に向かって何とおっしゃつたの?。」

「全部売り払い、だよ」と彼は答えました。

「じゃあ結婚式から、全く主とともに歩み出しましょうよ。」

という次第でそのお金は宣教のために献げられてしまったのです。

同じような献身の精神にジム・エリオットも覚醒されたのです。日記に彼はこう書いています。

「父よ、私を弱めて下さい。世のものすべてを握りしめるこの手をゆるめることができよう。わが生涯、わが名声、わが財産を握んでいるこの手の握力を、主よ、どうかゆるめさせてください。いいえ、父よ、むさぼりの心を失くさせてください。何回となく私は手をはなしても、結局は、無害な欲求というむさぼりで手放したものに見合うものを手に入れたのでしたのでしょうか。ああ、むしろ私の手をカルバリーの釘をさされるために開かせて

ください。キリストの手が開かれたように。そして、すべて手放すことによって私を今縛っているすべての鎖からはなれることができますように。御子は、しがみつくべきこの世のもののごとくではなく、天国を、神とともにあることを思っておられました。それゆえ、私の手の握りも開かせてください。」

私たちの不忠実な心は、主の言を文字通り受取るのは不可能だと言つてでしょう。もしすべてを捨てたら、私たちは飢えてしまつたらう。けっきょく、私たちは自分の、また自分の愛する者の将来のために備えをしなければならぬ。もし、クリスチャンみんなが、すべてを捨ててしまつたら、主の働きを誰が支えるのだろうか。また、裕福なクリスチャンも何人かいなければ、恵まれた階層の人々にどうやって福音を伝えることができるのか。という具合に次から次へと議論がとびだしてくるでしょう。これらの議論はすべて、主イエスはその語られたことを文字どおり言われたのではないと言っているのに他なりません。

しかし、事の真実は、主の命令に対する服従はもつとも正しく合理的な生活となり、最大の喜びを得ることができるとして生活に導くのです。聖書によって経験によってあかしされている所によれば、キリストのために犠牲的に生きる者は誰でも決して乏しくなつて苦しむことはありません。

せん。人が神に従う時、主はその人の面倒を見てくださるのです。

すべてを捨ててキリストに従った人は、仲間のクリスチャンから養われることを期待するぶらぶらとした生活困窮者にはなりません。その人は、

- 1、勤勉です。自分と家族を養うために勤勉に働きます。
- 2、儉約します。できる限り経済的に切りつめます。そうすれば今の必要を満たせば、それ以上のものは主の御業のために用いることができるのです。
- 3、先見の明があります。地上に富をたくわえる代りに天に宝を積みます。
- 4、将来のことは神に委ねています。老後の保証のために莫大なたくわえをするのに、人生の最上の部分を費してしまふ代りに、キリストへの奉仕のために人生の盛りを献げ、将来のことを主に任せます。もし、神の国と神の義とをまず第一に求めるなら、食物や着物に事欠くことはない（マタイ六・三三）と信じているのです。

その人にとっては、富を将来困る時のためにたくわえることは正しくないことなのです。彼は次のように論ずることでしょう。

1、魂の救いのために用いることのできるお金をもっていないながら、良心に痛みを感じることなく、将来のためにそれをたくわえておくことがどうしてできるでしょうか。

「世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。」(ヨハネ第一、三・一七)

「もう一度、この大切な命令——あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい(レビ一九・一八)を考えてみて下さい。私たちが十分あり余る程豊かであるのに、隣人が飢えているのを平気で見ていられるとしたら、その隣人を自分自身のように愛していると本当に言えるでしょうか。言葉に表わせない神の賜物を知って喜んでいる人すべてに、こう訴えさせていたいただきたいのです。」

「あなたは全世界の富と引き換えに、この真理を売り渡しますか。」

そうしたくないなら、私たちの財によって他の人たちが聖別され、天来の慰めを得る方法を知ることができるのに、その道をとぎやましてしまうことのないようにしましょう。」

A・N・グローブス

2、もし、キリストの来られるのが近いとわたしたちが本当に信じるなら、自分のお金を即刻使いたいと思うでしょう。さもなければ、永遠の祝福のために用いることができるにもかかわらずそのお金をサタンの手ににぎられ、失われてしまうことになるかもしれないのです。

3、お金を持っていて、それを用いようとしないうで、どうして我々はなお、良心に責めを感じずに、伝道の働きのために必要を手立て下さい。と主に対して祈ることができまうか。キリストのためにすべてを捨てることこそ、偽善的な祈りから私たちを、解放してくれるのです。

4、もし、私たちが従えないでいる領域があれば、どうして他の人たちに神のすべての勧めを余すところなく教えることができるでしょうか。

5、この世の人たちは、将来のためにあり余るほどのたくわえをします。これは、目に見えるところによって歩んでいることであり、決して信仰によって歩んでいるものではありません。クリスチャンは神に依り頼む生活をするようにと召されたものです。もし、地上に宝を積み上げるなら、この世の行き方と何の違いがあるでしょうか。

私たちは家族の将来の必要のために備えなければならぬという主張を私たちはよく耳にします。そうしなければ未信者に劣ってしまうというのです。この主張を裏づけるのに次の二つの聖句があげられるのです。

「……子は親のためにたくわえる必要はなく、親が子のためにたくわえるべきです。」(コリ

「もしも親族、ことに自分の家族を顧みない人がいるなら、その人は信仰を捨てているのであって、不信者よりも悪いのです。」(テモテ第一、五・八)

しかし、注意深くこれらの聖句を調べてみれば、これらが現在の必要についてであり、将来のための蓄えについてはないことがわかります。

最初の聖句ではパウロは、たとえを引き合いに出します。彼が親にあたり、コリントの信者たちは彼の子どもにあたります。パウロは彼らに経済的には何の負担もかけませんでした。主の僕として、その権利を当然持つてはいたのですが、そうはしませんでした。けっきょくそれは、パウロが彼らの信仰の父親であるからであり、親が子どもに与えるのであって、その逆ではないと言っています。ここでは、親が子どもを将来のために蓄えるということが問題になっているではありません。この箇所は、パウロの現在の必要を満たすことについて語っているものであって、将来の必要についてはありません。

一方、テモテ第一、五・八で、使徒パウロは貧しいやもめたちに対する配慮について論じています。彼の主張しているのは、親戚の者が面倒をみるべきだということです。もし親戚がいなかったり、親族がその責任を果せないときには、「地域教会がそのやもめの世話をしなさい」

ということなのです。けれども、ここでも問題とされているのは現在の必要であり、将来へのたくわえではありません。

神の理想はキリストのからだに属する一人々々が仲間の信者のさしせまった必要を顧みることにあります。

「今あなたがたの余裕が彼らの欠乏を補うなら、(将来)彼らの余裕もまた、あなたがたの欠乏を補うことになるのです。こうして、平等になるのです。『多く集めた者も余るところがなく、少し集めた者も足りないところがあった。』と書いてあるとおりです。」(コリント第二、八・一四、一五)

もし将来の必要のためにたくわえておかねばならないと感じているクリスチャンにとつてひとつの難しい問題があります。いったいどのくらいたくわえたらよいでしょうか。それゆえ、そういう人は、際限もなく財産を増やすのに躍起となつて人生を費してしまい、自らの最高のものを主イエス・キリストにお献げする機会をのがしてしまうのです。無駄にすごした人生の終りになってはじめて、その人は救い主のために全身全霊を傾ける生活をするなら、必ず必要は満たされるのだということを確認することになるのです。

もし、すべてのクリスチャンが主イエスの言を文字通り受け入れるなら、主の働きに資金が不足するようなことはないでしょう。そうすれば、福音はもっと力強く、もっと広く伝わって

いくはずです。もし、あるところでキリストの弟子が必要に直面しているとき、持っている物を何でも分け与えることは、他の弟子たちにとって誇りにさえなることでしょう。

さて、この世の裕福な者を救いに導くには、裕福なクリスチャンは絶対必要だとする見解は正しくありません。パウロがカイザルの家の者を福音に導いたのは、彼がカイザルの囚人であった時でした。(ピリピ四・一二) 神に従うなら、神がすべてのことを取り計らって下さると信じることができます。

主イエスの模範はこの問題の決め手になります。しもべは主人にはまさるものではないからです。

「この世で主は貧しく、みすばらしく、さげすまれていたのに、しもべが裕福になり偉くなり、敬まわれることを求めるのは間違っている。」
ジョージ・ミュラー

「キリストの苦しみの中には貧しさも含まれてる。(コリント第二、八・九) もちろん、貧しきというのは必ずしもぼろをまもって来たないなりをすることではない。それは、たくわえとか、ぜいたくに暮らすお金がないということを意味する。……30年程前のことであろうか……アンドリュウ・マーレーが指摘した。主とその弟子たちはそのなすべき業を、貧しくならずしては成し遂げられなかった。他の人を助けようとする人は自ら、あのサマリヤ

人のように低くならなければならぬ。人類の大多数はずっと貧しかったし、今も貧しいのである。」

A・N・グローブス

家庭生活を営むのにある程度の物的財は必要だとある人は弁明するでしょう。確かにそうです。クリスチャン実業家が今日事業を営むのにある程度の資本を持っていなければならぬと弁明するでしょう。確かにそうです。又自動車などの物的財産は、神の栄光のために用いることもできると弁明するでしょう。確かにそうです。しかし、これらの真の必要以上のことにについては、クリスチャンは福音を広めるために質素に儉約して犠牲を払って生きなければなりません。その信条とすべきは

「懸命に働け。少なきを遣い、多くを与えよ。すべては主に献げよ。」A・N・グローブス

私たちは各々神の前にすべてを捨てるとは自分にとってどういふことなのか申し開きをする責任があります。どの信者も他を律することはできません。各々は主の前に真剣に祈って得られた導きに従うべきです。これは、はなはだ個人的問題だからです。

もし、以上のような祈りの結果主が今まで味わい知ったことのない敬虔さに導いて下さることがあれば、そこには自慢できるものなどありません。私たちの払う犠牲など、カルバリーの犠牲に比べれば、犠牲とは呼べないものなのです。その上、私たちは、どのみち持ち続けるこ

との出来ないもの、又もつ愛着を感じえないものをお返ししたにすぎないのです。

「失ってはならないものを得るために、持ちつつけることのできないものを捨てる人はか
しこい人である。」

ジム・エリオット

三、弟子への道を妨げるもの

キリストに従おうとはじめた者なら、行く道に、逃げ道がいくつも口をあけてくることを
経験するでしょう。ひき返す機会はなんべんとなく訪れます。十字架をけずって軽くしてあげ
ようという声も聞こえてきます。この自己放棄と自己犠牲の道から救い出してくれるものは、
いくらでもあります。

このことについては三人の弟子志願者の話の中に巧みに描かれています。三人ともキリスト
の声よりも他の声を優先したのです。

「さて、彼らが道を進んで行くと、ある人がイエスに言った。「私はあなたのおいでになる所なら、
どこにでもついて行きます。」すると、イエスは彼に言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巢が
あるが、人の子には枕する所もありません。」イエスは別の人に、こう言われた。「わたしについて
来なさい。」しかしその人は言った。「まず行って、私の父を葬ることを許してください。」すると
彼に言われた。「死人たちに彼らの中の死人の父を葬らせなさい。あなたは出て行って、神の国を

言い広めなさい。」別の人はこう言った。「主よ。あなたに従います。ただその前に、家の者にいとまごいに帰らせてください。」「するとイエスは彼に言われた。「だれでも、手を鐮につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。』(ルカ九・五七―六二)

名前は分かりませんが三人の人がイエス・キリストに面接にやって来ました。彼らはイエスに従いたいと内的促しを感じました。けれどもなにかが入りこんだため自分の魂を主に全く献げることが邪魔されてしまったのです。

せつかち氏

最初の人はせつかち氏と呼ばれています。彼は熱狂的にどこにでもついていくと主に申し出ました。「私はあなたのおいでになる所なら、どこにでもついて行きます。」「どんな犠牲も払いきれないことはない。どんな十字架も重すぎることはない。どんな道も乗り越えられないことはない。」「このせつかち氏の喜んで従いたいとの申し出に対して、救い主の答えは、一見答えになっていないように思えます。「狐には穴があり、空の鳥には巢があるが、人の子には枕する所もありません。』しかし、実際には主の答えはまことに的を射っていたのです。こんなことを

主は言われたのではないのでしょうか。「あなたはどこにでも喜んで私について来ると言っていますが、物質的に恵まれない生活でも喜んで耐えられますか。狐の方が私よりもはるかに物質的には恵まれています。鳥ですら自らの巢を持っているのに、私には家などなく、私が創造したこの世界を歩きさすらい人なのです。あなたはほんとうに身を落ちつける家を犠牲にしてまで私について来たいのですか。私に忠実に仕えるためには、当然あるべき生活の安楽さにも犠牲にすることができませんか。」

すぐ分かるようにこの人はそれ以上、従ってはいけませんでした。なぜなら聖書にはこの人について他に触れていないからです。この人にとってはキリストに対する献身よりも地上での快適さの方が慕わしかったのです。

のろのろ氏

次の人はのろのろ氏と呼ばれています。この人は最初の人のように自分の方から申し出た訳ではありません。むしろ救い主が弟子になるよう招かれたのです。この人はあからさまに断わりはしませんでした。主に何の関心も示さなかった訳でもありません。しかし彼にはまず自分でしたいことがあったのです。これが彼の大きな罪でした。自分の意志をキリストより先にし

たのです。「まず行って、私の父を葬ることを許してください。」たしかに、息子が親に尊敬の心を示すのはまことに正しいことです。また父親が亡くなったとしたらキリスト信仰の範囲で、相応に葬式がなされるべきでしょう。

しかし、当然の権利義務であつてもそれが主イエスを益することよりも優先されるならば絶対的に罪となります。この人の人生の究極の欲求は「主よ、まず私に……」という包み隠さない申し出の中にあらわになつています。それ以下に続く言葉は彼のまず自分を先に出したいという潜在する欲求をカムフラージュしているに過ぎません。

彼は「主よ、まず（私を主にして下さい。私の顔を立ててください。……）」という言葉が、全く論理的矛盾であつて、不可能なことであるのを全く認識していません。もしキリストが主であるなら、キリストがまず先になるべきです。もし「私」という人称代名詞が王座を占める限り、キリストにはもはや主導権がありません。のろのろ氏には、なすべき仕事がありました。彼は仕事を優先しました。ですから、主が次のように言われたのは適切な指摘でした。

「死人たちに彼らの中の死人の父を葬らせなさい。あなたは出て行って、神の国を言い広めなさい。」この言葉はまた次のように言い換えても差し支えないでしょう。

「霊的に死んでいる人でもできることは結構あります。しかし、人生には信者にしかできないことがあります。だから未信者でもやることができるようなことをして人生を費やすような真似をしないように心しなさい。霊的に死んでいる者に肉体的に死んだ者を葬らせなさい。あなたはあなたにしかできないことをしなさい。わたしの目的を地上に成し遂げていくことを、人生の最重点項目としなさい。」

のろのろ氏には、その犠牲があまりにも高価だったようです。彼は名も成さず、生涯を終ることになるのです。最初の人は、物的快適さが弟子になることの障害とすれば、この人についてはキリストの存在に賭けることよりも仕事とか職業が大事だったと言えます。ともあれ、決して世俗的な職業につくことが間違っていると云っているのはありません。ただ、ほんとうの弟子の生涯には、神の国と神の義をまず第一に求めることが要求されるのです。信者同様あるいはそれ以上未信者がやれることのために人生を費やすべきでなく、手の仕事は単に日常的需要を支えるためのもので、クリスチャンの主たる召命は、神の国を宣べ伝えることにあるのです。

軟弱氏

三番目の人は軟弱氏と呼ばれています。この人は、主に従いたいと申し出たことにおいては

最初の人に似ていますが、それに矛盾する言葉を加える点は、一番目の人に似ています。彼はこう言いました。「主よ。あなたに従ってまいります。しかし、その前に私が家族の者たちにとまごいすることを許して下さい。」

繰り返すならば、彼の要求、それ自体基本的に何も責められる所はないと認めざるを得ません。自分の家族に敬愛を示したり、別れの際に礼儀を尽くすことは、神の律法に反することではありません。それではこの人はどの点で失格したのでしょうか。答えはこうです。

彼が主のことより、感情的人間の絆を大事にしたために他なりません。だから、鋭い洞察力を持って主イエスは言われました。「だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。」言い換えれば、「私の弟子に、あなたのような、自己中心的で芯のない性格のものはふさわしくありません。私は、家族の絆をさへ捨てることをよしとし、家族に対する感傷に惑わされず、自分の生活において何者にもまさって私を第一にする者をこそ望むのです。」

軟弱氏はイエスを去り、悲しみながら道を下っていったと結論せざるを得ません。彼の弟子になりたいとの過剰すぎる程の熱望も、気心の知れた家族とのつながりという岩にぶつかってもろくもこなみじんに粉碎されてしまったのです。たぶん、母親が泣き泣き訴えたのかも知れません。「母をおいて宣教に行くなんて！ 私の心は張りきけてしまいますよ！」実際にはどう言ったか知る術もないのですが、分かることは、聖書があわれみ深くこの気弱な人物の名前をあげようとしないうことです。彼は引き返すことによって人生最大の機会をとり逃がしてしまつたし、「神の国にふさわしくない者」との名前を刻まれてしまったのです。

まとめ

これまで、主イエス・キリストに終りまでついていけなかった三者のうちに見られる弟子になることへのおもな障害、三つを扱ってきました。

せつかち氏——地上的安楽に対する愛

のろのろ氏——仕事・職業の優先

軟弱氏——血のつながった家族的絆の重視

主イエスは、かつてそうであつたように、今も勇氣をもつて犠牲的に付き従う人々を求めておられます。

逃げ道が「自らをいつくしめ！ その道より遠く離れよ！」といまでも必死に引きとめよう

とします。だからほとんどの者が、主イエスの召命に答えようとはしないのです。

四、弟子と管理人

(ルカ一六・一―一三を読むこと)

不正な管理人のたとえが語られたのは弟子たちに対してでした。主はその中ですべての時代の弟子に適用される原則を明らかにしようとしたのです。実のところキリストの弟子とは、キリストの財と利益を守ることをゆだねられた管理人にあたるのです。

このたとえ話は、むつかしい点を沢山含んでいます。不正と不正直を勧めているともとれま
す。しかし、適切な光のうちに理解されるなら、いかに重要な教えがなされているのかが分か
ります。

話の要点はこうです。一人の金持ちが自分の事業をきりまわす人を一人雇っていました。し
ばらくたつと、この主人はその雇い人がお金を乱費していることを耳にします。すぐ彼に会計
報告を求め、解雇することを知らせました。

すると雇い人は、先ゆき真つ暗になりました。苦しい肉體労働をするには年をとりすぎてい
るし、こじきをするのも恥ずかしい。そこで彼はこれから先のために友だちをつくることを思
い当たりました。彼は主人の債務者の一人を呼んで尋ねました。

「私の主人にいくら借りているのか。」すると

「油三七〇リットル」と答えがかえってきました。

「さあ、その半分だけ返しなさい。それで済みにしよう。」と雇い人は言いました。また別の債務者のところへ行つて尋ねました。

「いくら借りがあるか。」するとその取り引き客は

「小麦三万七〇〇リットル」と答えました。

「わかった。三万リットル返しなさい。それで精算が終ったことにしよう。」

この不正直な管理人の行為より、さらにショックなのは、それにつづく言及です。

「この世の子らは、自分たちの世のことについては、光の子らよりも抜けめがないものなので、主人は、不正な管理人がこうも抜けめなくやったのをほめた。」(八節)

不正直な商売のやり方を明らかに認めていることをどう理解したらよいのでしょうか。一つのことばは確かです。それはこの管理人の主人も、われらの主も、こんな不正直さを勧めてはいないことです。そのことだけでこの人は首にされてしまふはずです。正しい人にとってこんなごまかしや不忠実さをとつてい認めるわけにはいきません。たとえがどんなことを他に教えていようが乱費が正当化されることを示してはいないはずです。

不正な管理人がほめられているのは、ただ一つの点だけです。それは彼が将来に備えたことです。管理人をやめさせられたのち友人となって助けてくれるように備えたのです。彼は「今」ではなく「その時」のために行動したのでした。

そして、これこそがこのたとえの要点なのです。この世の人々は、将来にそなえるために大胆に行動します。まず彼らが心配するのは、定年後、老後の生活です。だから、収入が得られなくなつても、生活をしていけるだけのあてを作るため、昼も夜も働いているのです。生活が保証されるためには、ありとあらゆる手段を用いるのです。

この点では、クリスチャンよりもまだ救われていない人の方がずっと賢いようです。しかしどうしてかと考えてみると、クリスチャンの未来はこの地上にあるのではなく、天国にあるのだから、当然と言えるかも知れません。これは大事な点です。未信者にとって将来とは現在と墓場の間にあるのであり、クリスチャンにとって未来とは、キリストとともに永遠に生きることです。

さらにこのたとえは、将来の生活のために、クリスチャンが天国の生活のために備えるよりも、この世の人々はもっと考え深く、より積極的に備えていることを教えています。この考えのもとに、主イエスさまはこの教訓の具体的な適用をなさいました。

「そこで、わたしはあなたがたに言いますが、不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなつたとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。」

不正の富とはお金やその他の地上の財産を指します。私たちは、これらのものを用いて人々をキリストに導くことができます。お金を有効に使って導いた人々のことをここでは「友」と呼ばれています。富がなくなる時（地上を去る時か、キリストに天国へ連れ去られる携挙の日）がやって来ます。その時、財を賢く用いて捕えた人々がみんな歓迎して私たちを永遠の住まいに入れてくれるのです。

これが、賢い管理人が将来に備えるやり方です。この世で安楽な生活のために、短い一生を無駄に費やすことをせず、自らの財を用いて人々をキリストに導き、天国でその人々に囲まれるさいわいを思い熱心にはげむ姿です。

お金は聖書、あるいはその分冊、トラクト他の文書に変わり、また、宣教師や他の働き人を支えるために使われました。お金はキリスト教のラジオ放送や他の有益な活動のために献げられました。つまりお金はキリストの福音を広めるのにとありとあらゆる方法で使われたのです。

「天に宝をたくわえるただ一つの方法は、天国へ行くもののためそれを用いることである。」

自分の財が貴重な魂の救いのために用いられていることを知るときクリスチャンは、「物」に対する愛着を失ってしまいます。贅沢・裕福・豪華絢爛な生活は、腹の中で苦しくなつてしまいます。不正の富が神の小羊キリストを永遠にほめたたえる礼拝者と変えられるのを見たいとクリスチャンは熱心に求めるのです。クリスチャンは、他の人々の生涯が変えられることにより神のみ名が永遠にほめたたえられ、またそれらの人々自身にも永遠の祝福をもたらすことができるという事実魅せられているのです。

クリスチャンにとつて、ダイヤモンドもルビーも真珠も銀行預金も種々の保険も立派な邸宅もレジャー用ポートも高級車もただ不正の富に過ぎません。自分のために使えば、やがて崩れてなくなつてしまいますが、キリストのために用いれば、永遠にわたる配当を生み出すことになるのです。

物をどう扱うか、どこまでそれに執着するかによつて私たちの性格は試されます。主は10節でこのことを強調しています。

「小さい事に忠実な人は、大きい事にも忠実であり、小さい事に不忠実な人は、大きい事にも不忠実です。」

小さい事とは物を管理することを指します。忠実な人とは、物を神の栄光と周りの人々への

祝福のために用いる人々のことです。不忠実な人とは財産をつくり、贅沢な生活をし自分を樂しませる人のことを意味します。もし人が小さなこと（物）に信用がなかったら、どうして大きなこと（靈的なことの管理）を委ねられるでしょうか。もし人が不正の富に忠実でなかったら、キリストの代理人、神の奧義の管理者（コリント第一、四・一）としても立派にやれると私たちは、期待をかけることができるでしょうか。それゆえ、救い主はもう一歩進んで強調しています。

「ですから、あなたがたが不正の富に忠実でなかったら、だれがあなたがたにまことの富を任せるでしょうか。」（一一節）

地上の宝はまことの富ではありません。その価値は限りがあり、一時的なものです。靈的な宝こそ、まことの富であり、その価値は無限であり、つぎることがありません。もし人が地上の物の取り扱いに信用がなければ、この生涯における靈的祝福とか天国の富を神が委ねて下さることなどどうして期待できるでしょうか。また主はさらにこうも言っておられます。

「また、あなたがたが他人のものに忠実でなかったら、だれがあなたがたに、あなたがたのものを持たせるでしょうか。」（一二節）

物は私たちのものではなく神のものです。私たちのもちものすべては、神から委ねられたものです。私たち自身のものと呼べるものすべては地上においては、勤勉な学びと奉仕の実によるものであり、天国においては忠実な管理としての働きへの報酬なのです。

もし、私たちが神の財を管理するのにふさわしいものでないことがわかれば、どうして神の言葉の深い真理にかかわる働きをしたり、次の世で報いを受けることなど期待できるのでしょうか。強調点をのべてしめくり、主はこのたとえ全体の教えを要約されました。

「しもべは、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、または一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」（一三節）

忠誠は二つに分けることはできません。弟子は二つの世界に同時に仕えることはできません

ん。管理者として神を愛するか、富を愛するかのいずれかになります。富を愛するなら、神を憎むことになるのです。

心にとめていただきたい。それは、これが救われていない人々にではなく、弟子たちにあてて書かれていることです。

五、情熱

弟子は、優れた知性を持っていなくても赦されます。強いからだを持っていなくても赦されるでしょう。しかし、情熱がないなら、どんな弟子でも弁解の余地はありません。心が救い主のために真つ赤に燃えていないなら、責められます。

ですから、クリスチャンとは「あなたの家を思う熱心がわたしを食い尽くす。」(ヨハネ二・一七)と言われたお方に従う者たちなのです。我らの救い主は、神とその国への情熱で燃え尽きたのです。生半可な追従者にクリストの行列に加わる余地など残されてはいません。

主イエス・キリストは霊的に絶えず張りつめて生きておられました。「わたしには受けるバプテスマがあります。それが成し遂げられるまでは、どんなに苦しむことでしょうか。」(ルカ二・五〇)との主の言葉がそれを表わしています。またこんな忘れ得ぬ言葉もあります。「わたし(たち)は、わたしを遣わした方のわざを、昼の間に行なわなければなりません。だれも働くことのできない夜が来ます。」(ヨハネ九・四)
バプテスマのヨハネの情熱がいかに大きかったか、「彼は燃えて輝くともしびである。」(ヨ

ハネ五・三五)との主の言葉によって立証されています。

使徒パウロは熱狂者でした。彼の生涯の熱誠は次のように描かれています。

「彼は友を作ることには気を遣わない男だった。この世の物に対する欲求や望みもなく、この世での損失には目も留めず、生活に対する気遣いもなく、死に対する恐れもなかった。彼は何の地位も国も身分もない男だった。一つの思い——キリストの福音、一つの目的——神の栄光にかけていた。愚かであり、またキリストのために愚かと呼ばれることを喜びとした。熱狂者、狂信者とか他のどんな変人の名をもって世界が彼を呼びたいなら、呼べ。いやむしろ彼は変人そのものなのだ。彼を商売人、家長、市民、世界人、知識人、常識人などと呼ぶものなら、せっかくの彼の特質を台なしにしてしまうことになる。彼は語らなければならなかった。さもなければ、死を選ぶだけだった。しかし、たとい死んだとしても彼は語り続けるだろう。休みもなく、海や陸、岩地、あてもない砂漠を飛び回った。彼は大声で語りつづけ、それをいとわなかった。何物も彼が語るのを押しとどめることはできなかった。牢獄で彼は声を上げ、嵐の中でも黙ってはいなかった。恐ろしい裁判所や玉座の王を前に真理の代弁者としてあかした。死よりほかに彼の口を封じるものはなく、彼の最期が来たと

き、何と、頭が身体から切り離されてしまうまで、彼は語り、祈り、あかしし、信仰告白をし、懇願し、闘い、そしてついに血も涙もない人々を祝福さえたのである。」

他の神の人も神を喜ばせようとするこの同じ燃えさかる欲求を抱いていたのです。

C・T・スタッドはかつてこう書いています。

「奏樂や鐘の音の内に

誰が住もうとも

我、救いの店を営みまし

地獄の前庭の真中に」

そして、たまたま思いがけないことに、スタッドをすべてを捨ててキリストに献身するようにならしたのは、無神論者による一つの記事だったのです。その記事は次のように言っています。

「もし、私が、何百万人もの人が告白しているように、この地上における信仰の教えとその

実践が、次の世における運命を定めると私が確信できるなら、信仰は私にとってすべてとなるだろう。地上の楽しみはむなしなもの、この世の心配は愚かなもの、この世の思想や、感覚は空虚なものとして投げ捨てるであろう。信仰こそは、目がさめた時から夜寝るまで頭の中にあって離れないものとなる。その信仰の目的のためにのみ働くであろう。一つの魂が救われるために一生涯苦しんだとしてもそれをよしとするだろう。地上での結果がいかなるものであっても、いささかも手をゆるめることなく、地上の楽しみも、苦しみも、一瞬たりとも私の思いをとらえることはないだろう。私は永遠を見上げることのみ全力をあげるだろう。そして回りにある魂に目をとめることに死力を尽くすであろう。その魂はまもなく、永遠の祝福にあずかるか、あるいは永遠の呪いに落ちていくのである。そして、世界に出て行って時が良くても悪くてもみ言葉を語り続けるだろう。用いる聖句はこれである。「人は、たとい全世界を得ても……いのちを損じたら、何の得があろう。」

ジョン・ウエスレーは情熱の人でした。彼はこう言いました。「心を尽くして神を愛し、罪のほか何も恐れぬ百人のクリスチャンを我に与えよ。さらば、世界を動かさん。」

ジム・エリオットは、エクアドルで殉教しましたが、彼もイエス・キリストのために燃えたたいまつでした。ある日、彼は「神は、御使いたちを風とし、仕える者たちを炎とされる。」(ヘブル一・七)のみ言葉に思いを巡らし、日記にこう書きとめています。

「我 炎となりたし

我を雑事よりときはなち 燃えたたせたまえ

みたまの油もて満たし 炎と燃えたたせたまえ

されど炎ははかなく 束の間なり

わが魂よ 汝は耐え得るや 短き一生を

偉大なる 短き一生を全うせしお方 わが内に宿る

神の家を思ふ熱心に 食いつくされし方

「汝のたきぎと われをなしたまえ 炎の神よ」

現在の教会が恥すべきことは、共産主義者や異端の人たちが、クリスチャンよりもずっと熱心に働いているということです。

一九〇三年、一人の男が十七人の仲間とともに世界に挑戦しはじめました。その男の名はレ

「ニン。一九一八年までに、その数は四万人にふくれ、その四万人で彼は、ロシアの一億六千万を手中に収めたのです。運動はさらに広がり、今や世界の三分の一の人口を支配するに至りました。彼らの原則にどれだけ反対しようとも誰もその情熱には畏敬の念を禁じ得ません。メキシコで共産主義者になったアメリカ人大学生の手紙をビリー・グラハムが披露した時、多くのクリスチャンは大いに叱責の念にとらえられました。その手紙の目的は婚約者にどうして彼が婚約を破棄するのか説明するものでした。」

「私たち共産主義者は、高い率の犠牲者を出してきました。私たちは射たれ、首をつられ、リンチにあい、牢屋にぶち込まれ、中傷され、解雇され、その他あらゆる仕方で行ったためつけられる者たちなのです。私たちの何パーセントかは殺されたり牢に入れられたりしています。生きていくのに最低限に必要なものを以外はすべて党に返します。私たち共産主義者は、映画とかコンサートとか、最上のステーキとか満足な家や新車などに使う金や時間など持ち合わせていないのです。私たちは狂信者と呼ばれてきました。実際、狂信者たちです。私たちの生涯は『世界共産化闘争』という大使命によって支配されているのです。」

私たち共産主義者にはお金ではけっして買えない人生の哲学があります。闘争の目標と人生における明確な目的を持っています。私たちは自らの足らないことや自己を一つの偉大な人類の運動に従属させます。そしてもし、個人的に生活が辛く思えたり、自我が党に従うことを苦痛に感じているようだったら、私たちは、各々がその小さな歩みにおいて人類にとって何か新しい真実なより良きもののために貢献しているのだと考えることによって自らを十分に慰め得るのです。今、私には死ぬほど夢中になっていること、それは一つだけです。それは、共産主義の目標です。これこそが私の命であり、仕事であり、宗教であり、趣味であり、恋人であり、妻・愛人であり、パンなのです。昼はそのために働き、夜はそのことのみをみます。私を握りしめて離さないその手は時とともに強くなり弱まることは、ありません。それゆえ、もはや、私の生活を導くこの力を抜きに友情や恋や会話を成り立たせないのです。私は人々や本や思想や行動を、それがいかに共産主義の目標に影響を及ぼすか、あるいはそれに対してどういふ姿勢をとっているかに従って評価します。私はもついでに自らの思想によって牢につながれた者です。そして必要とあらば、銃殺されることになってもその心の用意はできているのです。」

もし、共産主義者が自分たちの目的のためにこのように献げつくすことができるのなら、クリスチャンはどんなに熱心に、自分たちの栄光ある主を愛し、喜んで献身するのに、どれほ

ど熱心に自らを注ぎ出さねばならないでしょうか。たしかに、もし、主イエスに何らかの価値があるとしたら、彼は私のすべてに値するものとなります。

「もし、キリスト教信仰が、そもそも信じるに値するならば、それは熱烈に信じるに値するものである。」
フィンドリ

「もし、神がキリストにおいて世界の救いのために、目ざましい、不思議なことをほんとうになされたのなら、そして神がそれを人々に知らされたのだとしたら、それを無視し、否定し、適当にあしらうものすべてに対して、嫌悪を示すのはクリスチャンのつとめである。」

ジェームズ・デニー

神は聖霊の支配に完全に立ちかえった人を望んでおられます。このような人は、他の人にはあたかもぶどう酒に酔っているように見えます。彼らと親しい者たちが認めているのは、彼らが「深く大きく、つきまとって離れず、決して飽くことのないキリストへの渴き」に駆り立てられていることなのです。

すべての弟子、志願者にとって自分の生涯にどうしても必要なことは、情熱であることを肝に銘じておきましょう。またライル主教が、述べたことを成し遂げられるよう、切に求めましょう。

「キリスト教信仰に熱心な人とは、何にもまして、一つのことしか目に入らない人のことである。正直だ、熱心だ、妥協しない、徹底している、心がこもっている、靈に燃えていると言われるだけでは不十分である。一つのことしか見ない、一つのことと氣をとめる、一つのことのために生きる、一つのこととにのみ込まれている人。そしてその一つのこととは、神を喜ばせることなのである。生きていようが死のうが——健康であろうが病氣であろうが——金持ちであろうが貧乏であろうが——人を喜ばせようが怒らせようが——賢いと思われようが愚かと思われようが——非難されようが賞賛されようが——榮譽に浴しようが屈辱にまみれようが——熱心な人はこんなことを全く氣にとめないのである。むしろ一つのことと燃えるのである。そして、その一つのこととは神を喜ばせること、神の榮光を前進させることに満足するのである。たといこのことで燃えつきたとしてもその人は何とも思わない。——かえって他ならぬ。たといこのことで燃えつきたとしても自分は燃えるためにあるのだから、燃えつきたとしたらそれが神に任せられた使命を全うしたにすぎないと考えているのである。このような人は常に自分の情熱のはけ口を見つめる。説教したり、実際に働いたり、施したりできないうとしても、泣き、求め、祈り続けるだろう。そう、もし貧しく、病氣で寝たきりであったとしても、罪と絶えず戦うことによって、周りの人々を影響し罪の繩目から解き放っていく

だろう。もし谷間でヨシユアとともに戦うことができないとしても、丘の上で、モーセ、アロン、フルのなしたわざをするだろう。(出エジプト一七・九―一三) 自分自身で戦うことがもうできなくなったとしても、別のところから助け手が起こされて、働きが全うされるまで、休みなく主に求めるだろう。これこそが、キリスト教信仰における「情熱」と私が語る時の意味なのである。」

六、信 仰

生ける神に対して疑うことのない動かない信仰なくして、真の弟子とは言えません。神のために勇敢な業をなさうとする人は、まず神に完全に信頼しなければなりません。

「すべて神の巨人たちは、自分とともにおられる神に信頼したゆえに、神のために偉大なことをなし得た弱い者たちなのである。」
ハドソン・テラー

さて、真の信仰とはいっても何らかの神の約束、神の言葉に基づいています。これは大切なことです。信徒はまず何らかの主の約束を読んだり聞いたりします。そして聖霊がその約束を個人にふさわしいしかたで心の中に刻みこみます。クリスチャンにはそうして神が直接語って下さったと分かるのです。約束されたお方は決してそれを破れないと確信するので、その約束はもう果たされたのも同然、たとい人間的に不可能であってもすでに得られたかのごとくに確実なものとして受けとめるのです。

あるいは約束より命令と言った方が良いかもしれません。信仰にとってはどちらでも同じことです。神が命じられるとそのとおりになります。ペテロには、主が水の上を歩くように命じ

られれば、自分にはそれに見合った力が与えられるに違いない、と信じていることができるのです。(マタイ一四・二八) 主が私たちにすべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい、と命令されているなら、必要な恵みが与えられることも確かです。(マルコ一六・一五)

信仰は可能の範囲で働くものではありません。人間的に可能なことの中に神への栄光はありません。信仰は人間の力がやむ時に始まるのです。

「信仰の部門は、見込みがなくなった時、先行き真つ暗な時に始まる。」

ジョージ・ミューラー

信仰は言います。もし『不可能』だけが障害なら、それは必ずなし得る、と。

「信仰は神を視野に入れる。それゆえ信仰は絶対に何物も困難とは思わない——然り、不可能を笑いとばすのだ。信仰の計りでは、神がすべての問題に対する十分な答えである——」。

すべての困難に対する完べきな解決である、信仰はすべてを主のもとに明け渡す。だから信仰にとっては一億であろうと一兆であろうとすこしも問題ではない。神がすべてを満たす方であると知っているからである。信仰はすべての助けを主のうちに見出す。不信仰は言う。「そんなこと、そんなことがどうしてできるだろう。」それは『どうして』ばかりである。しかし信仰は何千という『どうして』に対してたった一つの偉大な解答を出す。その答えと

は「神」なのである。」

C・H・マッキントッシュ

人間的には、アブラハムとサラが子どもをもつけることは不可能でした。しかし神は約束されたのです。そしてアブラハムにとって、不可能なことは一つしかなく、それは神が約束を破られることだったのです。

「彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。それは、『あなたの子孫はこのようになる。』と言われていたとおりに、彼があらゆる国の人々の父となるためでした。アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだに死んだと同然であることと、サラの胎の死んでいることを認めても、その信仰は弱りませんでした。彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。」(ローマ四・一八—二二)

信仰は約束を見

神にのみ向かう

不可能を笑い

叫ぶ「必ず成る」

58

私たちの神は不可能の専門家です。(ルカ一・三七) 神にとって不可能なことは何もありません。(創世記一八・一四)

「人にはできないことが、神にはできるのです。」(ルカ一八・二七)
信仰は主の約束、信じる者には、どんなことでもできるのです。(マルコ九・二三)を盾に譲らず、パウロとともにこう言って歡喜するのです。私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。(ピリピ四・一三)

疑いは障害を見出すが

信仰は道を見出す

疑いは暗黒の夜を見るが

信仰は日の光を見る

疑いは踏み出すことを恐れるが

信仰は高く舞いあがる

疑いは「誰が信じるか」と問うが

信仰は「私だ」と答える

信仰は超自然なことや神的事象に関わっているもので、いつも「合理的」に映るわけではありません。アブラハムが出て行く所を知らずして、ただ神の命令に従って出て行ったことは「常識」に従ったものではありません。(ヘブル一・八) ヨシユアが武器も持たずエリコを攻撃したのは、彼が「たけていた」ためではありません。(ヨシユア六・一―二〇) 世界中の人々はこんな「狂気の沙汰」をあざ笑うことでしょう。しかしそれは有効だったのです。

しかし、実際は信仰ほど合理的なものはありません。造られた者が造ったお方を信頼することほど合理的なことが他にあるでしょうか。決して偽ることも、失敗することも、誤ることも分らないお方を信じることは間違いないでしょう。神を信頼することは人がなしうるもつとも分別があり、かしく、理にかなったことなのです。それはけっして暗黒にとびこむことではありません。信仰は確実な証拠を要求し、神の誤りなき言葉のうちにそれを見出すのです。主にある信仰にはどのような危険も含まれていないのです。

信仰は真に神に栄光を帰します。それこそがどこまでも信頼のおけるお方に対するもつとも

59

ふさわしいことなのです。いっぽう、不信仰は神の栄光を辱めます。主を偽りとし(ヨハネ第一・五・一〇)、イスラエルの聖なる方を制限するのです。(詩篇七八・四一)

信仰は人への態度も正しくします。すべてのものの主権者たる主の前にひれ伏して懇願するへりくだった姿をとるのです。

信仰は見える所とぶつかり合います。パウロがこう呼びかけています。「

「私たちは見るところによってではなく、信仰によって歩んでいます。」(コリント第二、五・七)

見える所によって歩むとは、目に見える生活の支えを持つていることであり、将来のために十分な貯蓄があることであり、不測の事態に対処すべく賢い方法で保険をかけておくことです。信仰による歩みはこれとは全く正反対です。それは一瞬一瞬神にのみ頼ることです。主に依り頼むことがたえず試される危機の連続です。肉は見えざる神に完全に依存することから身を引きます。おこりうる損害を軽減する方法を探し求めます。肉は、もしどこへ行こうとしているのか分からなければ、神経が完全にすりきれてしまいやすいのです。しかし、信仰は神の言葉に対する従順の生活に踏み出し、周囲の状況を超え、主にすべての必要をゆだねるのです。信仰によって歩もうと決心している弟子は誰でもその信仰が試されることにならずけるはず

です。遅かれ早かれ人間の資源は尽き果てます。窮地に立たされて、仲間を求めたい誘惑にかられるでしょう。しかし、もしほんとうに主に信頼しているなら、神にのみ頼っていくでしょう。

「私の必要を直接的、間接的によらず人に知らせることは信仰の生活からの別離であり、積極的に神を辱めることである。それは事実、主を裏切っていることなのである。それは、神は私を見捨てた、だから仲間を助けを求めなくてはならない、と言っているのと同じである。そうして生ける泉を捨てて、破れた貯水槽に戻ることである。それは私の魂と神との間に人を入れることであり、そして私の魂に対する豊かな祝福と、神に対して帰すべきふさわしい栄光とを奪い去っているのである。」

C・H・マッキントッシュ

弟子の正常な態度は信仰が増すことを願うことです。(ルカ一七・五) 弟子はすでに魂の救いについては主を信じています。今や主の支配に明け渡す自分の領域を広げようと欲するので、病氣、試練、悲劇、死別に直面すると、新たに、より親密に神を知るようになり、信仰が強くなります。そして次の約束が真実であることを証明するのです。

「せつに主を知ること求めれば、わたしたちは主を知ろう。」(ホセア六・三 欽定訳)

神が信頼できるお方であることを知れば知るほど、さらに大きなことのために主に頼っていくことを切に求めるようになるのです。

信仰は聞くことに始まり、聞くことは神の言葉によるのですから、弟子の欲するところは聖書にひたる——日ごと夜ごと、読み、学び、覚え、冥想することとなければなりません。聖書こそ海図であり羅針盤であり、灯台の光なのです。

信仰の生活には、いつも前進する余地があります。信仰によってなし遂げられたことを読んでみると、私たちは小さな子どものように、限りなく広い海の波打ちぎわで遊んでいるに過ぎないことを覚えるのです。信仰による勇敢な行爲はヘブル書十一章の中に出て来ます。三十二節—四十節に至って莊重な響きをか纳えます。

「これ以上、何を言いましたか。もし、ギデオン、バラク、サムソン、エフタ、またダビデ、サムエル、預言者たちについても話すならば、時が足りないでしょう。彼らは、信仰によって、国を征服し、正しいことを行ない、約束のものを得、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣營を陥れました。女たちは、死んだ者をよみがえらせていただきました。またほかの人たちは、さらにすぐれたよみがえりを得るために、釈放されることを願わないで拷問を受けました。また、ほかの人たちは、あざけられ、むち

で打たれ、さらに鎖につながれ、牢に入れられるめに会い、また、石で打たれ、試みを受け、のこざりて引かれ、剣で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、乏しくなり、悩まされ、苦しめられ、——この世は彼らにふさわしい所ではありません。——荒野と山とほら穴と地の穴とをさまよいました。この人々はみな、その信仰によってあかしされましたが、約束されたものは得ませんでした。神は私たちのために、さらにすぐれたものをあらかじめ用意しておられたので、彼らが私たちと別に全うされるといふことはなかったのです。」

最後に一言。すでに述べてきましたが、信仰によって歩む弟子は、たしかにこの世の人々、あるいは他のクリスチャンにさえ、夢想家、熱狂者として見られるでしょう。しかし次のことを覚えておくときよいでしょう。

「人を神とともに歩ませることができるとは、同時にその人をして、人々の考え方に対してそれ相応の評価をすることを可能にするのである。」

C・H・マッキントッシュ

七、祈り

いままで祈りについて書かれた完全に満足できる唯一の書物は聖書です。その他の本ではどうしてもまだ掘り下げが足りない、及ばない点があるとの感が拭えません。しかし、この小冊子は、他者の所産を改善しようとするものではありません。むしろ、祈りの重要な原則をいくつか、とくにそれが弟子たる者の資質に関連するものに限ってまとめてみましょう。

(一) 最高の祈りは、強い内的必要から出て来ます。

私たちはこれが真実であるのを経験しています。私たちの生活が静かで、隠やかであつたら、祈りは鈍く、だるいものになりやすいのです。しかし、危機とか、重病とかつらい死別などに会ふと私たちの祈りは熱をおび生き生きとして来ます。誰かがこう言いました。「天にまで届く矢は、いっばいに引きしぼられた弓から射られなければならない。」緊迫感、孤立感、必要を意識することは、最高の祈りが生み出される母胎です。

しかし、不幸にも私たちが欠乏から身を守ることに専心しています。儲けのいい商売をして将来考へうるあらゆる事態に対して十分な蓄えをしています。また、人間的知恵を極めて、裕

福になり、ますます物もちになり、足りないものはありません。そして私たちは、どうして祈りの生活がこつも浅く、生気のないものであるのか、どうして火が天から下らないのか、と思ふのです。私たちが現実に見える所によつてではなく、信仰によつて歩んでいるなら、祈りの生活は大きく変革されたことでしょう。

(二) 聞かれる祈りの条件の一つは、真心から神に近づぐことです。(ヘブル一〇・二三)

これは主の前に純粹で誠実でなくてはならないことを意味します。偽善があつてはならないのです。もしこの条件に私たちが合格していれば、自分たちの力でできるのに、神に何かをしてください、などは祈らないでしょう。たとえば、手許にそのために使える余分な貯えがあるのに、ある伝道計画のためにこれこれの金額を与えて下さい、と私たちは主に願うことはしないでしよう。神は侮られるお方ではありません。主がすでに答えてくださり、私たちがそれを使いたくないだけなら、それ以上祈りに答えることはなさいません。

これに関連して、もし私たちが自ら出て行きたくないのだつたら、他の人を遣わして下さいと主に祈るべきではありません。回教徒、ヒンズー教徒、仏教徒のために、何千という祈りがなされてきました。しかし、もし祈った人がみなこれらの人々に福音を伝えるために主に用いられたいと心から望んでいたとしたら、キリスト教の宣教の歴史はもっと励ましを与えるもの

となっていたはずで。

(三) 祈りは率直に信じて疑わないでするものです。

祈りに関する神学的問題にとらわれることもよくあることですが、それは靈的感覚を鈍らせる効果しかありません。祈りに関するすべての神秘を説明することよりむしろ実際に祈った方がよいのです。神学博士に祈りに関する学説を語らせておけばよいので、単純な信徒には子どものように信じて、天国の門に殺到させればよいのです。『教育のない者は力で天国をもぎ取るが私たち知識のある者はそれによって人間の領域を超えられない』と語ったのはあのアウグスチヌスだったのです。

(四) 真に力強い祈りをささげる秘訣は、何ものにも執着しないこと、です。

すべてをキリストに引渡しなさい。主にすべてを献げなさい。救い主に従うためにすべてを捨てなさい。キリスト・イエスをなによりも崇める、献身は、主が大へん喜ばれるものなのです。

(五) 犠牲が伴う祈りには、とくべつの配慮を神がお与えになると信じます。

朝早く起きる人は、同じように早く起き、父なる神から一日の指針をいただいたお方と親しく交わりをもちます。同様に、夜を徹して祈り抜くほどに、徹底して熱心な人に、神の力が与

えられないことは決してありません。何の苦勞もない祈りには何の価値もありません。そのような祈りは、キリスト教の安っぽい副産物に過ぎないのです。

新約聖書は、しばしば祈りと断食とを結びつけています。食を断つことは靈的訓練には貴重な助けです。人間の側から言えば、考えがはっきりし、集中力が増し、鋭敏になります。神の側から言えば、私たちが食物よりも祈りを優先する時、主は特に喜んでその祈りに答えようとなさるのです。

(六) 自己中心的な祈りを避けましょう。

「願っても受けられないのは、自分の快樂のために使おうとして悪い動機で願うからです」

(ヤコブ四・三)

私たちの祈りの主要な願いは、主ご自身の願いと一致しなければなりません。まず、こう祈るべきです。『御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように』それから、こう続けることが許されるのです。『私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。』

(七) 神は偉大なお方ですから、私たちは大きなことを求めて、神を崇めるべきです。

「神から大きなことを期待する信仰をもとう。なんと私たちは少ししか期待せず、主を悲しませてきたことか。私たちは今まで、こんな不完全な勝利、乏しい収穫、高きを慕い求めるのに熱のない態度によくも満足してきたものだ。そのために、自分たちの周りにいる人たちに、私たちの神は偉大である、という印象を与えてこなかった。他の人の注意をひきつけ、どこからあんな力が出てくるのかと問わずにはおれない生活を私たちは見せることなく、キリストのことを伝えた人々の目の前に、主の栄光を表わしてはこなかった。かの使徒がしばしば、人々は、私のうちにいる神を賛えた」と言われたようには、私たちは言われてこなかったのである」

E・W・ムーア

(N) 祈りの中で、まず、自分が神の意志に沿っているか確かめなくてはなりません。そして主が祈りを聞かれ答えてくださると信じながら祈るべきです。

「何事でも、神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事はすでにかなえられたと知るのです。」(ヨハネ第一、五・一四—一五)

主イエスの御名によって祈るとは、主の御旨のままに祈ることです。主の御名によって私たちが真実に祈ると、それは主ご自身が父なる神にお願いしていることと同じなのです。

「またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう。」(ヨハネ一四・一三—一四)

「その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねません。まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが父に求めることは何でも、父は、わたしの名によって、それをあなたがたにお与えになります。」(ヨハネ一六・二三)

「まことに、あなたがたにもう一度告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父はそれをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」

(マタイ一八・一九—二〇)

「主の御名」によって求めるとは、主から手をとられて、祈りに導かれることである。つ

まり、こう語ることが許されるなら、主が私たちのかたわらでひざまずいてくださり、その御思いを私たちの心をおして流れ出させてくださることなのである。これこそが、「主の御名」によって祈ることの意味である。主の御名とは主の存在そのもの、主のご性質を表わすものであり、それゆえ、キリストの御名によって祈るとは、主ご自身の祝福された御旨に従って祈るという意味でなければならぬ。神の御子の御名によって私たちは悪しきことのために祈ることができらうか。私が祈ることは、ほんとうに主の御名の表現でなくてはならない。私は祈りの中で、このことができるらうか。祈りは聖霊、すなわち、キリストの心、私たちのうちにあり私たちのためを思うキリストの望みの力によって息づかなくてはならない。主ご自身が、私たちにさらに主の御旨によって祈ることを教えてくださるように。私たちは祈りを閉じるにあたって、「祝福ある我らの主の御名によって」との句をぬかすことを考えてはいけぬ。かえって、祈り全体に祝福あるイエスの御名が浸透し、充滿する——つまり、すべてその御名にしたがって——ようにならねばならない。」

サムエル・リグウト

(九) 私たちの祈りの生活が真に効力を発するためには、たえず神と清算がなされてなくては

なりません。つまり、罪が心の中に入ってきてしまったと気づいたら、すぐに告白し捨てなければなりません。

「もしも私の心にいたく不義があるなら、主は聞き入れてくださらない。」(詩篇六六・八)

私たちはキリストのうちにとどまらなければなりません。

「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことはあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。」

(ヨハネ一五・七)

キリストにとどまる人は、主と近く過ごすので、主の御旨を深く、豊かに知っています。そのようにして、その人は賢く祈ることができ、また答えを確信することができます。さらに、主にとどまる生活には、主のご命令に従うことが要求されます。

「また求めるものは何でも神からいただくことができます。なぜなら、私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行なっているからです。」(ヨハネ第一、三・二二)

(+) 一日のうち、ある決まった時間にしか祈らないようであってはいけません。

祈りの態度をもっと発展させて、通りを歩きながらでも、車を運転しながらでも、机に向かつて勉強しているときでも、家事をしているときでも、主に頼るようになりましょう。ネヘミヤはこの無意識的、自然なタイプの祈りの古典的模範です。(ネヘミヤ一・四後半) 祈りのたびごとに主の前に行くというのではなく、そこにとどまり続け、いと高き方の隠れ場に住むことゝは良いことです。

(+) 最後に祈りは、具体的になされねばなりません。明確な答えが得られるのは明確なことを祈る時だけです。

祈りは驚くばかりの特権です。ハドソン・テラーが語ったように、祈りによって私たちは神を通して人を動かすことを学ぶことができますのです。

「祈りという驚くべき領域で、奇跡を行なうことができるとは、何とすばらしい使命が私た

ちの手に委ねられているのだらう。私たちは冷たく暗い場所にも日光を照らすことができ
る。失意落胆の獄屋に、希望の灯をともしこともできる。囚人の手足の鎖を解くこともでき
る。遠い国に行ってしまった者に天国の温かさや光を届けることもできる。霊的に衰えてい
る者には、天からの強壯剤をもたらすことができる。たとい、その人たちが海のかなたで苦し
ていたとしても祈りは奇跡をもたらすのだ！」

J・H・シヨウエット

これに加えて、ウエンハムという作家は自ら証言しています。

「説教はすばらしい賜物である。祈りはさらにすばらしい賜物である。説教は剣のように
近い距離で使う武器である。ずっと遠くにいる者にはそれが届かない。祈りはライフル銃の
ように、射程が広く、状況によってはより効果的である。」

八、戦い

新約聖書を読む時、たとい不注意に読みとばしたとしても地上におけるキリストのご計画をしばしば戦いになぞらえて語っていることに気がつかない人はいないでしょう。真のキリスト教は現代のキリスト教国のお祭り騒ぎからは遠く隔っています。それは決して今日ばかりこつている贅沢な楽しみを求める生き方とは一緒にはなれません。むしろ、それは死に至る戦いであり、暗闘の力に対抗する止むことのない闘争なのです。戦いの火ぶたはきられるばかりでもう後にひくことはできないと覚悟のできていない弟子は価値がありません。

戦いにあつては一致が絶対に必要です。ささいなことで口論し合ったり、派閥意識をぶつけたり、どつちつかずに態度を留保している暇などありません。どんな家でも内輪もめすれば立ちゆきません。それ故、キリストの兵士は一致していなければなりません。一致への道は、へりくだることです。ピリピ二章にそのことが教えられています。ほんとうに謙遜な人と争うことは不可能です。争うには、二人がいなければなりません。「高ぶりによってのみ争いはやつ

て来る。」高ぶりのない所には、争いの余地は残されてはいません。

戦いは耐乏と犠牲的生活を要求します。何かの戦いには、常に広範な配給制度が敷かれます。クリスチャンにとっては、今や、戦いが始まっており、出費は最小限にとどめ、できる限りの資力を戦いにつきこまなくてははいけないことをとつくに気づいていなければならぬ時なのです。

R・Mという名の青年信徒ほどこのことに気づいている人は多くはありません。一九六〇年、彼はあるクリスチャン・スクールの一年生の会長になりました。任期中、クラスのパーティーや、贈答品の費用をクラスの会計から計上しようという提案がなされたのです。福音の前進のために直接関係しないこのような会計の運用を認めようとせずR・Mは会長としてのポストを辞任したのでした。彼の辞任が伝えられたその日、左記の手紙が級友たちに配られたのです。

「親愛なるクラスの友へ」

クラスのパーティー、贈答品の件が役員会に出されて以来、私は会長としてこのような領

域におけるクリスチャンのあるべき態度を考え続けてきました。私たちは自分自身を、自分のお金を、自分の時をキリストに全部献げることにより「わたしのためにいのちを失う者は、それを救うのです。」という主の言葉の真実性を発見することが出来ます。それによつて私たちは、最上の喜びを味わうことができるのです。

クリスチャンが自分たちのお金や時を未信者への明確なあかしや神の子どもをキリストのうちにて建てることには至らない事柄に費やすことは、毎日七千人の人が飢えて死に、世界の半分以上の人が人類の唯一の希望である方について未だ聞いていない事実と調和しないように思えるのです。

好きな者同士の小グループで集まったり、似た者同士としか付き合わないようになり、お金や時を自分たちの楽しみのために浪費することをやめて、イエス・キリストのことを聞いたことのない世界の六〇%の人々に福音を伝えることを助けたり、あるいは隣近所の沢山の家に福音を伝えるなら、どんなに神の栄光を表わすことができるでしょうか。

国内国外の隣人を助けて、イエス・キリストの栄光を表わすように立派に財を用いる機会があり、必要としている所があるのを知っていながら、クラスの会計を自分たちのために不必要に運用するのを許すことは私には到底できません。

多くの貧しい人たちがいるのを私は知っています。もし私の中の一入だったら、私のために福音を伝え、物質的な必要を満たすことができる人が、多くいてくれたら、と私は願うことでしょう。

「自分にしてもらいたいと望むとおり、人にもそのようにしなさい。」

「世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。」

それゆえ、以上の理由で、私が会長として辞表をみんなに提出しているのは、みんなが、ご自身のすべてを与えてくださった主イエス（コリント第二、八・九）を見上げるためであり、愛と祈りのゆえに、このようにするのです。

ともに信じている主にあつて R・M

戦いは苦しむことを要求します。今日、若者たちが自分の祖国のために、進んで命を投げ出すようとしているなら、クリスチャンはキリストとその福音のために、どれほど喜んで命を捨てようとしなければならぬでしょうか。何の犠牲も伴わない信仰には何の価値もありません。もし、主イエスが、私たちにとつて意味のあるお方だとしたら、私たちにとつてすべてを意味

するお方であり、身の安全や、苦しみから、免れることを考えて、主への奉仕が妨げられてはならないのです。

使徒パウロが、自分の使徒職を心のせまい批判者たちの攻撃から守るために、彼は家系や教育やこの世の常識を指摘しませんでした。むしろ、主イエス・キリストのために受けた苦難を指摘したのです。

「彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうなので。私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあり。幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともあり。このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかる諸教会への心づかいがあります。」

(コリント第二、一一・二三―二八)

弟子のテモテにすばらしい励ましを与える中で、彼はこうすすめています。「キリスト・イエスのりっぱな兵士として、私と苦しみをともしてください。」

戦いは完全な服従を要求します。すぐれた兵は上官の命令に口答えせず、躊躇せずに従います。キリストが、これ以下のことで満足すると考えるのは愚かなことです。創造主、贖い主として、イエスはご自分に従って戦いに出て来る者が、ご自身の命令に喜んで、完全に従うことを期待する権限を十分もっているのです。

戦いには武器を使う訓練が必要です。クリスチャンの武器とは祈りであり、神の言葉のことです。クリスチャンはまず、熱心に信じてたゆみなく祈ることに自分自身を献げなければなりません。こうすることによってのみ、敵の要塞を破壊しつくすことができます。そして、御霊の剣、それは神の言葉ですが、その使い方に熟練していなければなりません。敵は何とかわだまして、この剣を手からすべり落とそうと力の限り、ありとあらゆることをしてくるでしょう。敵は聖書の靈感について疑問を投げかけます。矛盾があると言われている所に目を向けさせます。科学や哲学や伝統的考え方から、反論を持ち出します。しかしキリストの兵士は自分

の立っている基盤を守り、時が良くても悪くても自分の武器を使うことによって、その効果を証明していかなければなりません。

クリスチャンの戦いの武器はこの世の人々には愚かに思えます。エリコに対して効力を発したあの計画は今日の軍事指導者からは嘲笑されることでしょう。ギデオンの取るに足りない軍隊は嘲笑を誘うだけでしよう。ダビデの投石器や、何世紀もずっと通じて起こされてきた神の愚か者たちのつまらない軍隊については、どんなことが言えるのでしょうか。

しかし、神を信じる者は、神が大軍隊の側におられないで、むしろ弱い者やこの世のさげすまれた者を助けられること、それによってご自身が、ご栄光をお受けになることを喜ばれることを知っています。

戦いは敵とその戦略とを知ることがを要求します。それはクリスチャンの戦いにもあてはまります。

「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」(エヘソ六・一二)

また、

「サタンさえ光の御使いに変装するのです。ですから、サタンの手下ともが義のしもべに変装したとしても、格別なことはありません。彼らの最後はそのしわざにふさわしいものとなります。」

(コリント第二、一一・一四—一五)

訓練されたクリスチャン兵士は自分にとってもっとも苦しい抵抗は、酔っぱらいや、こそ泥や、売春婦からなされるのではなく、むしろ信仰を表明している奉仕者からされることを知っています。神のキリストを十字架に釘づけにしたのは、宗教的指導者でした。初代教会を迫害したのも宗教的指導者でした。パウロは神のしもべと称する者たちの手から、もっとも過酷な攻撃に会ったのです。同じことが時代とともに繰り返されてきました。サタンのしもべは義のしもべのように変装しているのです。それらは宗教的言葉を語り、宗教的衣装を身にまとい、もっともらしく敬虔にふるまいますが、その心はキリストとその福音に対する憎しみで満ちています。

戦いは、専念すること、を要求します。

「兵役についていながら、日常生活のことに掛かり合っている者はだれもありません。それは徴募した者を喜ばせるためです。」(テモテ第二、二・四)

キリストの弟子は自分の魂が、主イエス・キリストに完全にお献げしようとするのを妨げる何物をもがまんできなくなりませす。その人は他の人に礼儀に反することはしませんが、愛想がありません。しかし、彼は一つの情熱、それだけを持っているのです。その他はすべて封じ込められねばなりません。

戦いは危険に際して勇気を要求します。

「ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武器をとりなさい。では、しっかりと立ちなさい。」

(エペソ六・一三―一四前半)

エペソ六章十三―十八節では兵士としてのクリスチャンの武器の備えが背中の方には何も無い、つまり後退する備えがないということとはよく指摘されることです。それではなにゆえ後退してしまつのでしょうか。もし私たちが、私たちを愛してくださった方によって圧倒的な勝利

者になるのだったら、もし、神が私たちの味方であり、だれも敵対し得ないのなら、もし戦う前から、勝利が確信できるならば、どうして引き返すことなど考えられましょうか。

九、世界を治めること

神は私たちを世界統治のために召しておられます。私たちが人間として生れ、虫けらのように一生を終えることは決して神の望まれる所ではありません。私たちが「敗戦投手」としてつまらない一生を費すのも神の目的ではありません。

主がさいしょに人を造られた時、彼に地球を支配する権限を委ねられました。主は人に栄光と誉れをかぶらせ、すべての物がその足もとにひれ伏すように置かれました。人間は尊厳と主権とを——天使らのそれよりわずかに劣るのですが——着せられたのです。

アダムは罪を犯した時、神の命によって自分のものとなっていた支配権の大部分を台なしにしてしまったのです。その結果、揺るぎない支配権を行使できなくなり、一部の領域をやつとすることで支配するだけになりました。

福音には、ある意味で私たちが支配権を取り戻せることが含まれています。それは今やかみついてくる犬や毒へびを支配する問題ではありません。むしろそれは異教徒が勝ちとられ、地の果てが私たちの所有になることを求めていることなのです。

「真の帝国主義は道徳的、靈的支配による帝国にあり、それは純粹なきよい生活の輝きによって人々を捕える魅力と支配力である。」
J・H・ジョウエツト

事実、クリスチャンの召命のこの尊厳はアダムの知り得なかつたものです。私たちは世界を贖うための神の協力者です。

「これが私たちの使命である。人々を主の御名によって、生涯をかけての忠誠、自己の統御、神の国への奉仕のために油注ぎをすることである。」
ディンズデル・T・ヤング

今日多くの人々の悲劇は私たちの崇高な召命を認識できないことです。私たちは現状に甘んじ、安きにつく、生活をよしとしています。私たちは飛ぶかわりに、這っています。王様になるかわりに奴隷になっています。国々をキリストのものとする幻を持つ人はほとんどいません。

スポルジンはその例外でした。彼は次のように力強いメッセージを自分の息子に送っています。

「私はあなたに、神から宣教師になるよう導かれているとしたら、百万長者として一生を終えてほしくない。」

私はあなたに、宣教師になるのが合っているとしたら、王のもとで無駄口をたたいていてほしくない。

金持がなんであろう、権力者がなんであろう。名誉がなんであろう。魂をキリストへと勝ちとる栄光や、他の人の土台の上にはなく、はるかかなたの国へキリストの福音を教え、キリストの弟子として建てあげていく特別な栄誉と比べたら、何になるだろうか。」

もう一つの例外は名高い宣教師の代表的存在であるジョン・モットです。クーリッジ大統領が、駐日大使となるよう要請したところ、彼はこう答えました。「大統領閣下。神様がご自分の大使に私を任命したのですから、他のどんな声も耳に入らないのです。」
ピリー・グラハムが三番目の例外の人のことを語っています。

「スタンダード石油会社が極東で代理人を求めていたところ、ある宣教師に白羽の矢が立ちました。会社は五〇〇万円の報酬を申出しましたが断られました。一五〇〇円でもだめでし

た。三〇〇〇万円でもだめでした。会社は言いました。「何が不服なのかね。」すると彼は答えました。「あなたがたの提示額はたいへん結構です。しかし仕事があまりにつまらないのです。神は私を宣教師として召されたのです。」

クリスチャンの召命はすべてのうちでもっとも崇高なものです。そのことが分かれば、私たちの人生は新たに気高さを帯びてくるでしょう。私たちはもはや自分のことを「鉛管工に召されている」とか「物理学者として召されている」とか「歯科医として召されている」とか言わなくなるでしょう。むしろ自分たちは「使徒として召されている」のであって、他のことは全部、生活を支えるための手段に過ぎないと考えるようになることでしょう。

私たちは自分たちが、すべての造られた者に福音を伝え、すべての国民を弟子とし、全世界に福音を満たすことに召されているのを知るようになります。

広大な使命、とあなたはおっしゃいますか。広大？ 確かに広大です。しかし不可能ではありません。この使命の大きさは世界をミニチュアにした以下の概観が示しています。

「もし、想像上のこととして現在の世界の全人口——三十億を超えているが——を一つの

町の千人の住民に圧縮したら、次のように明らかな対比の図を見ることが出来る。

六〇人がアメリカ合衆国の人口にあたる。他の国々は九四〇人となる。その六〇人のアメリカ人は町全体の所得の三五％を握り、九四〇人は残りの六五％を所得を分け合う。

町にいる三六人のアメリカ人は（信仰を告白している）キリスト教会会員であり、二四人はそうではない。町全体としては二九〇人が、（信仰を告白している）クリスチャンであり、七一〇人は違う。少くとも町全体で八〇人が共産主義信奉者であり、三七〇人が共産主義支配のもとにある。たぶん七〇人くらいが町全体の中で（信仰を告白している）プロテスタントの信徒になる。

町全体で三〇三人が白人で六九七人が有色人種である。六〇人のアメリカ人は平均寿命が七〇年であり、他の九四〇人は四〇年以下である。

アメリカ人は他の残りの人たちに比べ、一人あたり平均して一五・五倍もの物を所有している。彼らは町全体の食糧供給の一六％を生産し、そのうち一・五％を除いては全部自分たちで消費しており、大部分は将来使えるように金をかけて貯蔵しておくのである。町にいる九四〇人のアメリカ人以外のほとんどがいつも腹を空かせており、いつ満腹できる食物が手に入るか全然見当がつかない状態である。それを思い起こせば、食物供給におけるこの不公

平から生み出される状況や莫大な食物貯蔵の事実は、とくにアメリカ人がすでに食物摂取量を七二％も上まわって吸収していることとあいまって、誰の目にも極めて明らかになる。余っている食物を分配してしまえば貯蔵費が浮いて随分節約ができるのであるが、彼らにはそれが、何もかも他に与えてしまっただけだからかんなるお人好しの危険な計画であるように思えるのである。

六〇人のアメリカ人は町全体の供給量のうちで電力は残りの人の一二倍、石炭は二二倍、石油は二一倍、鉄鋼その他の製品は五〇倍を占有している。

六〇人のアメリカ人のうちで最低所得者グループであっても町の残りの者の多くの平均よりもずっとましである。文字通り、町のアメリカ人以外の多くは貧しく、空腹で、病気で、無教育である。半数近くは読み書きができない。半数以上はキリストのキの字も聞いたことがなく、キリストが何を意味するのか聞いたこともない。しかし、カール・マルクスについて聞いている者が、まもなく半数を超えようとしているのである。「括弧内のことばは引用者による」

ハリー・スミス・レイパー

それではどうしたら、私たちの世代のうちに全世界が福音によってキリストに立ち返るでし

よか。唯一の答えは、心を尽くして神を愛し、自分のように隣人を愛する。人々によってな
のです。その使命を完遂しようとする不屈の愛からあふれたす献身だけが鍵なのです。

キリストの愛によって縛られている人は、主のためにはどんな犠牲も、犠牲とは思いません。
その人は主に対する愛ゆえに地上の利益のためにも決してしないようなことを大胆にすること
でしょう。自分の命も惜しいとは思いません。人々が福音を聞いて救われるために、彼らは喜
んで自分の命をささげるでしょう。また事実、ささげられてきました。

愛が動機とならないなら、その目的は望みのないものです。何の益もありません。その奉仕
はやかましいトランペットやジャンジャン鳴るシンバルと同じです。しかし愛の導きのもと、
人がキリストへの献身に燃えて進んでいくなら、地上のどんな権力も福音の波を押しとどめる
ことはできません。

こういう弟子たちの一団を想像してみましょう。彼らは隅々までキリストのものときれ、キ
リストの愛によって駆り立てられ、陸であれ海であれ、栄えあるメッセージを携える使者とし
て渡り歩き、うむことなく新しい地方へ急ぎ、どんな人に会っても、そのうちにキリストがそ
のために死なれた魂を見出し、それらの一人々々が救い主を永遠に礼拝する者になってほしい
と切に望むのです。それでは、この世離れしたこれらの人々は、キリストを知らしめるため

にどんな方法を用いるでしょうか。

新約聖書は世界に福音を伝えるために二つの主要な方法を示しているようです。一つは、公
けに説教することであり、もう一つは、個人的に弟子を育てていくことです。

第一の方法に関して言えば、それは主イエスとその弟子たちによく用いられたものです。人
人がともに集っていたところではどこでも、よき知らせを説く機会がありました。そう、市場
に、牢獄に、会堂に、浜辺に、川辺に、福音の集會が持たれたことを私たちは発見します。そ
のメッセージは緊急を要し、たぐいまれなすばらしいものであったため、伝統的集會場で語る
にとどめておくことなどもつてのほかだったのです。

キリスト教信仰を宣伝する第二の方法は、個人を個別的に弟子化していくことです。これは
主イエスがその十二弟子の訓練に使われた方法です。主はこの小グループの男たちをご自分と
ともにおらせ、送り出すために召されました。日に日に、主は彼らに真理を教えました。主は
彼らの前にその任じられた使命を置かれました。襲いかかってくる危険と困難を、前もつて、
ごまごまと、彼らに警告されました。主は彼らに神の深いご計画を知らせ、厳しくとも栄光あ
る神のご計画を遂行するご自身の協力者とされたのです。そして主は彼らを狼の中に羊をやる

ようにして送り出されました。聖靈に力づけられて、彼らはよみがえられ、昇天された栄光の主を世界に告げるために出かけていったのです。この方法が効果的であるのは、(裏切者が脱落してこの弟子の一団が十一人になってしまったにもかかわらず)主イエス・キリストのために彼らが世界をひっくり返してきた事実によってはつきりしています。

使徒パウロは彼自身この方法を実践したのみではなく、テモテにも同様に勧めているのです。

「多くの証人の前で私から聞いたことを、他の人にも教える力のある忠実な人たちにゆだねなさい。」(テモテ第二、二・二)

この方法の第一段階は注意深く祈りをもって忠実な人々を選ぶことです。第二段階は、彼らにその栄光に富むヴィジョンを分け与えることです。第三段階は他の人を弟子とするために、この人々を送り出すことです。(マタイ二八・一九)

数だけを追い求めたり、大衆に執着する者にとつて、この方法はまどろっこいものでしょう。しかし神はご自身のなさっていることをご存知であり、その方法こそが最上なのです。自己満足型クリスチャンの一大集団よりも、献身した少数の弟子たちの方が神のために多くのことを

なし得るのです。

この弟子たちが、キリストのみ名によって出て行く時、彼らは神の言葉の中に置かれた基本的原則に従うのです。まず彼らはヘビのように賢く、またハトのように無害です。彼らは困難な道を踏み行く知恵を神から引き出します。同時に、彼らは仲間との交わりにおいて柔和でありへりくだっています。だれも、彼らから暴力をふるわれることを恐れる必要はありません。人々はただ彼らの祈りとたえることのないあかしを恐れる必要があるだけです。

この弟子たちはこの世の政治とは一線を画します。自分たちがどんな形態の政府や政治的イデオロギーであれ、それと戦っていくように召されているとは考えないのです。どんな形の政府のもとでも働けるし、その政府があかしを曲げたり、主を否定することを要求しない限りそれに忠実です。主を否定することを要求された場合には、結果はどうであれ、従うことを拒否します。しかし決して政府転覆を謀ったり、革命戦線に加わることはしません。主はこう語られたのではないのでしょうか。もしわたしの国がこの世のものであったなら、わたしのしもべたちが戦ったことでしょうか。この人々は天の御国の大使であり、この世界を巡礼者や寄留者として渡って行くのです。

彼らは自分たちの行動すべてにおいて、あくまでも正直です。どんなごまかしも避けます。

彼らの「はい」は「はいを意味し」、「いいえ」は「いいえを意味するのです。うそも方便式のしばしば使われるうそを取り入れることを拒否します。どんな状況にしろ、将来に善がなされるために、悪を行なうことは決してしません。各々が罪を犯すよりは、死んだ方がましとする良心のあらわれなのです。

この人たちがつねに従うもうひとつの原則は、自分たちの働きを地域教会と結びつけることです。彼らは世界の収穫場所へ出かけて行って主イエスへの回心者を得ますが、それからこの回心者たちが強められ、聖い信仰に建て上げられる地域教会の交わりに導き入れます。真の弟子は地域教会こそが信仰を広めていくための地上における単位であり、長続きのする最上の働きはこの線に沿ってなされていくことを認識しているからです。

弟子は信仰を危機に陥れるおそれのあるどんな種類の連合をも賢く回避します。その運動がどんな人間的組織からも命令されるがままになることをいつも拒否します。進軍命令は天国の最高司令部から直接受けるのです。しかし、地域教会のクリスチャンの信任や推薦なしで働くという意味ではありません。むしろ、このような推薦を神の導きのしるしとして受け入れるのです。

けれども弟子は主の言葉と主の導きに従ってキリストに仕える必要性を説くのです。

最後に、この弟子たちは脚光を浴びることを避けます。裏方に徹しようとしています。彼らの目的はキリストの栄光を表わし、キリストを知らしめることなのです。自分のために大きなことを求めてはいません。自分たちの戦術を敵に見られることも望まないのである。だから、彼らは静かに日陰で、人の賞賛や非難など気にもとめずに働き続けるのです。天国が自分たちの働きの結果を知れる確実な最高の場所となることを知っているからです。

十、弟子たることと結婚

「また、天の御国のために、自分から独身者になった者もいるからです。それができる者はそれを受け入れなさい。」(マタイ一九・一二)

どんな弟子でも直面する大問題の一つは、はたして神は自分を結婚に導かれているのか独身に召されているのかということ。これは完全に主からの個人的導きによる問題です。誰も他の人を律することはできないし、こんな重要な領域で干渉することは危険な仕事です。

神の言葉からの一般的な教えは、結婚は人間のために神が制定したもので、それにはいくつかの目的があることです。

- 1、それは交わりと楽しみのために定められました。神は「人がひとりでいるのは良くない。」(創世記二・一八)と見られたのです。
- 2、それは子孫を残すために定められました。これは次の主の命令に示されています。「生

めよ。ふえよ。地を満たせ。」(創世記一・二八)

- 3、それは家庭や社会の純粋性を保つために設けられました。「不品行を避けるため、男はそれぞれ自分の妻を持ち、女もそれぞれ自分の夫を持ちなさい。」(コリント第一、七・二)

神の言葉の中には結婚とキリストへの純粋な献身、奉仕の生活とが相容れないことを示すものは何もありません。むしろ「結婚がすべての人に尊ばれるようにしなさい。寝床を汚してはいけません。」(ヘブル一三・四前半)と語られています。「良い妻を見つける者はしあわせを見つけ、(箴言一八・二二)とも記されています。伝道者の言葉である「ふたりはひとりよりもまさっている。」(伝道者の書四・九)はしばしば結婚にあてはめられ、とくに二人が主への奉仕とともに携わる時に用いられます。力を合わせた働きのさらにすぐれた効果は申命記三二・章三〇節のひとりが千人を追い、ふたりが万人を敗走させた、という言葉によって示唆されます。

しかし、結婚は人間一般に関する神のみこころではあるけれども、必ずしもすべての個人に對する主の御旨ではありません。それは奪うことのできない権利であるともみなされるかも知れません。しかし、主イエスの弟子は自分自身をキリストへの奉仕に、より専念させるために、

この権利を放棄することを選ぶことも許されます。

主イエス・キリストは天のみ国には、主のためにいわゆる独身を選ぶ人々がいることに注意をうながしています。

「というのは、母の胎内から、そのように生まれついた独身者がいます。また、人から独身者にさせられた者もいます。また、天の御国のために、自分から独身者になった者もいるからです。それができる者はそれを受け入れなさい。」(マタイ一九・一二)

これは明確に自主的な誓いであり、次の要素が条件になります。

- 1、結婚しないように神が導いていると感じること。
 - 2、家庭生活に対する余分の責任を免れて主の働きにもっと完全に献げたいと望むこと。
- 神の召命に対する確信がどうしても必要です。(コリント第一、七・七後半)これのみによって弟子は主が自制のために必要な恵みを与えてくださるとの確信を得ることができのです。次にそれは自発的になされなければなりません。
- 独身生活が聖職者の義務として強制されるところには、不純さや不道徳の危険性が大です。

使徒パウロは結婚しない人がしばしば王の王の任務に、より完全に自分を献げることができるとの事実を強調しました。

「独身の男は、どうしたら主に喜ばれるかと、主のことに心を配ります。しかし、結婚した男は、どうしたら妻に喜ばれるかと世のことに心を配ります。」(コリント第一、七・三二—三三)

それゆえ、彼は結婚していない男や、やもめが自分のようになること、つまり結婚しない状態であることを望んだのです。(コリント第一、七・七一—七二)

すでに結婚している者に対してさえ、時が縮まっていますので、すべてはキリストを知らしめる偉大な使命に道をあけなければならぬとパウロは主張したのである。

「兄弟たちよ。私は次のことを言いたいです。時は縮まっています。今からは、妻のある者は妻のない者のようにしていなさい。泣く者は泣かない者のように、喜ぶ者は喜ばない者のように、買う者は所有しない者のようにしていなさい。世の富を用いる者は用いすぎないようにいなさい。

この世の有様は過ぎ去るからです。」(コリント第一、七・二九—三一)

もちろん、これは、家族への義務を放棄すべきだとか、妻も子も捨てて、宣教師として飛び出していってしまふべきだということの意味しているわけではありません。それは人が家庭生活

の満足や楽しみのために生きるべきではないことを意味するのです。弟子は、自分の妻や子供がいるからと言って、キリストを後回しにするべきではありません。

C・T・スタッドは、婚約者が彼にあまり熱中して、主イエスを隅に追いやることを恐れました。これを避けるために、彼は婚約者に、毎日口ずさむようにと一つの句を作ってあげました。

「主イエスさま、あなたを愛します

私にとつてあなたこそ

ずっとすばらしいおかたです

私のフィアンセ（チャリー）よりも」

共産主義者は家庭の事柄を自分たちの大義のために征服するという偉大な使命に従属させえたのです。ゴードン・アーノルド・ロンズデイルはその見本です。彼が英国で一九六〇年、ロシアのスパイとして捕まった時、警察は彼の妻からの手紙と六枚におよぶ返事とを見つけたのです。彼の妻はこう書きました。

「人生ってどうしてこんなに不公平なの。あなたが働いているのもこれがあなたの義であり、あなたが自分の仕事を愛し、これをみんな、大へん良心的にしようとしていることも分

かるわ。それにもかかわらず、私の理屈はどういう訳か、女っぽく狭量なの。私、死ぬほど苦しいの。あなたが私をどのくらい愛してるか教えて。そうすれば気がおさまるかも知れないから。」

ロンズデイルはこう答えています。

「私が言いたいことは、私自身にはたった一つしか人生がないということ。それにしても、楽な人生ではない。私がしたいのは、人生をふり返って見た時、何も恥じることがない人生、そういう人生を送りたいということ。……まもなく私は二十九歳になろうとしている。まだ先は長いと言えらるだろうか。」

パウロはこう書きました。

「時が縮まっています。今からは妻のある者は妻のない者のようにしていなさい……。」
残念なことは、性急になされた、正しくない結婚が、悪魔の策略として用いられて、それにより、若い弟子たちがキリストのために効果的に奉仕する道からそれてしまうことです。多くの熱烈な奉仕者たちが、それまで忠実に仕えてきた歩みを結婚の祭壇で台なしにしてしまったのです。

「……すべての人にキリストを伝えるという主のご命令を遂行するのに、結婚は手ごわい

敵となる。結婚は神から与えられたものである。しかし、それが、神の命令に従う道の妨げとなるなら、誤って用いられているのである。海外への明確な召命を受けながら、伴侶によつて妨げられたため、行けなかつた多くの人々——男性も女性も——の名を私たちはあげる

ことができる。……なにもものも——たとい神の与えられた生涯の伴侶であろうと——一個の人間に対する神の意志を妨げてはならない。……今日、愛する者が神の意志よりも先に立つてしまつたため、魂がキリストなしで死んでいつているのである。」

独身生活が望ましいというのはとくに開拓の働きをする奉仕者の場合でしょう。

「最前線で奉仕する者は、生活の必需品でさえ否定し、あるのが当然な、快適な生活の楽しみなども、口にしなくなる必要があるかもしれない。このような人々の義務は、厳しさに耐え、生活の雑事に煩わされない良き兵卒となり、ぜい肉などに悩まされない競技者となることである。……それが特別な奉仕者の召命なのである。」

この召命を聞き応答する者には、報いが提供されています。

「まことに、あなたがたに告げます。……わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てた者はすべて、その幾倍もを受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。」

(マタイ一九・二八—二九)

十一、犠牲を計算に入れる

主イエスは、人々のきげんをとり、たやすく信仰告白に導こうとは決してされませんでした。また、人にうける説教をして、多くの人を引きつけようとはなさらなかったのです。

じじつ、人々が主の後に押しよせてきたとき、いつでも主は彼らをふり返り、一番きびしい弟子の条件をつきつけて、ふるいにかけられたのです。

あるとき、主は、従って行きたい、という者に向かって、まず犠牲を計算に入れることを警告されたのです。

「塔を築こうとするとき、まずすわって、完成に十分な金があるかどうか、その費用を計算しない者が、あなたがたのうちにひとりでもあるでしょうか。基礎を築いただけで完成できなかったら、見ていた人はみな彼をあざ笑つて、「この人は、建て始めはしたものの、完成できなかった。」と言うでしょう。また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとするときは、二万人を引き連れて向かつて来る敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうかを、まずすわって、考えずにい

れましょうか。もし見込みがなければ、敵がまだ遠くに離れている間に、使者を送って、講和を求めましょう。」(ルカ一四・二八一—三二)

ここで主はクリスチャン生活を建築や戦争になぞらえています。主が言われるように、完成するのに十分なお金があるかどうか確かめもしないで、塔を建てはじめるのはまったく愚かなことです。もしそうしたら、完成しないで残った骨組は、先見の明がなかった証拠として、立ち続けるでしょう。

真理がここにあります。大きな伝道集会の熱い雰囲気の中でキリストを受け入れる決心をするのは結構なことです。しかし、自分自身を否定し、日々十字架を負い、キリストに従うこととは、まったく別のことです。たとい、はじめクリスチャンになるために、何の犠牲も伴わないうとしても、キリストのために苦しみ、分離され、犠牲を払う道を一貫して歩むクリスチャンになるには多くの犠牲がいります。クリスチャンとしてのレースに良いスタートを切ることは、たいせつなことでしょう。しかし、順境の日にも、逆境の日にも、レースに健闘しつづけることはまったく別のことなのです。

世の人々は批判的な目を光らせています。何か不思議な本能によって、世はクリスチャン生

活が、すべての価値をもつか、何も価値がないかのどちらかであると見ています。世は完璧なクリスチャンを見るとばかにし、嘲笑し、笑い草にしますが、何ものも顧みずにキリストに自分自身を献げる人に対して、心の底では尊敬しているのです。しかし、中途半ばなクリスチャンを見ると、何よりも軽べつします。こう言ってあざ笑うのです。「こいつは建てはじめはしたが完成できなかった。回心した頃はたいへんな騒ぎだったが、今はもうおれたちと同じさ。スタートダッシュこそよけれ、今は足がもたついているよ。」

だからこそ、救い主は語られたのです。「犠牲を計算するがよい。」

主が語られた二番目の例は、他の王に向かって宣戦しようとする王に関することです。自分の一人の兵で敵のその倍におよぶ軍隊を迎え撃てるだろうかとまず計算することは、まず大切なことではないでしょうか。もし戦宣して軍隊が進軍をはじめた時点で考えなおすとはそれこそ、何と愚かしいことでしょうか。残された方法は、白旗を掲げ、降伏使節団を送り、みじめに地にひれ伏して、そして温順に平和協定を結んでくれるよう懇願することです。

クリスチャン生活を戦争になぞらえることは行き過ぎではありません。荒々しい敵——この世、肉、悪魔——が存在しているからです。落胆があり、流血があり、苦難があるのです。長い、苦しい不寝番をして、朝を待ちこがれることもあります。涙を流し、汗を流し、試練を受

けます。そして、毎日が死の連続なのです。

キリストに従って行こうとする者は誰でもゲツセマネヤ、ゴルゴダを思い起こすべきです。そして、犠牲を計算するのです。キリストに対する絶対的献身か、屈辱に満ち、墮落に陥って泣き言を言う降伏のどちらかしかありません。

この二つの例を引いて、主イエスは、人々に、ご自身の弟子になろうと衝動的に決心することに警告したのです。主は彼らに迫害、患難、苦悩を受けることのみを約束されただけです。まず座って犠牲を計算してみるべきなのです。

それでは、犠牲とは、何なのでしょう。つぎの節はこの問に答えています。

「そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。」(ルカ一四・三三)

犠牲とは、すべてのもの——人がもっているものやその特質すべて——を指します。救い主の犠牲はこれでした。主に従おうと願う者の犠牲がこれ以下のものであってはなりません。救いもし、筆舌に尽くしがたいほど豊かなお方が貧しくなられたとしたら、その弟子たちは、それ

より軽い犠牲で冠を獲得できるでしょうか。そして主イエスは、ご自身の話を次の語でしめくくっています。

「塩は良いものですが、もしその塩が塩けをなくしたら、何によって味をつけるのでしょうか。」
(ルカ一四・三四)

聖書の時代には、今日の食卓にあるような純粋な塩はなかったようです。その塩はさまざま不純物、つまり砂などを含んでいました。だから、塩が塩けをなくすことは可能だったのでしよう。残ったものは味がなく、価値のないものになります。それは土にも肥やしにもならないのです。時には道を造るのに使われました。そうしてこれは、もう何の役にも立たず、外に捨てられて人々に踏みつけられるだけです。(マタイ五・一三)

この例からの適用ははっきりしています。クリスチャンの存在の一大目的は、主に完全に献げつくされた生活によって、神が栄光をお受けになることです。クリスチャンは地上に宝をたくわえたり、自分への慰めとか楽しみを大事にしたり、世界に自分の名をあげようとしたり、自分の人生や能力を、この価値のない世界のために売ってしまったりして、味を失う可能性が

あります。

もし信者が自分の存在の中心的目标を見失ったら、すべてのことを見失ってしまったのです。その人は使い物にならないし、飾り物にもならないのです。そのさいごは、味気のない塩と同じように、人々の足で踏まれる、つまり、軽べつ、嘲笑によって踏みにじられるのです。むすびのことはこうです。

「聞く耳のある者は聞きなさい。」

しばしば主がきびしいことをおっしゃったときに、この言葉を加えられました。まるですべての人がこのことを受入れるわけではないことを、主はご存知であるかのようです。また、ある者は主の鋭い要求を鈍らせようとして、なにやかやと理屈を並べたてようとするのを主はご存じでした。

しかし、心が開かれていて、主の言われることは主ご自身と同じ価値があることを認めて、それに従う者たち（老いた人、若い人を問わず）がいることを主はご存じでした。

それゆえ、主は戸を開いたままにしておかれたのです。耳のある者は聞きなさい。「この聞

く者、とは犠牲を計算して、なお次のように言う人なのです。

「私はキリストに従うことに決めた

誰もいっしょに来る人がいなくても

それでも私は従っていく

この世を後にして、十字架を仰いで

もう引き返すことは決してない。」

十二、殉教の覚悟

人が心底からイエス・キリストに献身すると、生きるか死ぬかの問題は重要でなくなりま
す。大切なことは主が栄光をお受けになるかどうか、です。『ジョンとペティ・スタムの勝利』
を読むと、一貫して繰り返されていることは——『生きるにしても、死ぬにしても、私の身に
よって、キリストのすばらしさが現わされることを……』(ピリピ一・二一〇)があるのを見出
すでしょう。

同じようなことばが、宣教師として殉教したジム・エリオットの著作にも見られます。ホイ
ートン・カレッジの学生であった頃、彼は日記にこう記しました。

「アウカ族のために、死ぬ覚悟はできている。」
ほかのところに彼は書きました。

「父よ、私の生命をお受け下さい。そうです。あなたがお望みになるなら、私の血をとり、
あなたの祭壇の火で、燃やし尽くして下さい。私は惜しみません。それはもう私のものでは
ないのでから。おとり下さい。主よ。すべてをおとり下さい。私の生命を、この世のため

に供え物として注いで下さい。血のみが、あなたの祭壇の前に流れ出る価値があります。」
神に用いられた人の多くは、神との交わりにおいて、これと同じ心境に達していたようです。
彼らは次のことを認識していたのです。

「一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊か
な実を結びます。」(ヨハネ一二・二四)

喜んで彼らは、一粒の麦になりたかったのです。この態度は、救い主がその弟子たちに教え
たことと同じです。

「わたしのために自分のいのちを失う者は、それを救うのです。」(ルカ九・二四)

考えれば考えるほど、それは理にかなったことに思えます。

まずさいしょに、私たちの生命はもはや自分のものではありません。それはご自分の尊い血
の値で私たちを買い取られた方のものです。自分かつて、他のものに従って行くことなどで

きるのでしょうか。C・T・スタッドは自らこの問題にこう答えています。

「私は、私のために死なれたイエスのことを知ってはいた。しかし、主が私のために死なれたのなら、私はもはや自分のものではないということが、まったくわからなかった。贖いは買戻しであるから、もし私が主のものであれば、どろぼうになって自分のものでないものを持つとするとするか、すべてを神の前に明け渡すかの二つに一つである。イエス・キリストが私のために死なれたことがはっきりわかった時、主にすべてを献げていくことは難かしいとは思われなかった。」

次に、私たちは、いずれ、死んでいくのです。(もし生きている間に、主の再臨がなければ) 王の王に対する奉仕をしていて死ぬのと、ただ平均寿命を全うするにすぎない死を迎えるのとどちらが、悲しむべきことでしょうか。ジム・エリオットがこう言うのは的を射てはいないでしょうか。

「失うことのないものを得るために、持ち続けることのできないものを捨てる人は、決して愚かではない。」

三番目に主イエスさまが私たちのために死なれたのなら、私たちが最小限できることは、主のために死ぬことである、というのは反駁できない論理です。もし、しもべが主人にまざるものでないなら、主イエスさまよりも、安らかに天国に行く権利が私たちにあるでしょうか。この考えが、スタッドをしてこのように言わせたのです。

「イエス・キリストが神であり、私のために死なれたのなら、主のために尽くす犠牲はどんなに大きくても、大きすぎることはない。」

さいごに、私たちの生命を捨てることによって、周りの者たちに永遠の祝福がもたらされるのに、それをしないことは罪深いことです。医学の研究に貢献するため、人はよく自分の生命を提供します。他の人は、愛する者を炎につつまれたビルから救い出そうとして命をおとします。また人は敵の手から祖国を救うために戦って死んでいきます。人間の魂は、私たちにあって、どれ程の価値があるのでしょうか。

すべての人が殉教者として生命を捨てるわけではありません。火刑の柱や槍や断頭台は、どちらかと言えば選ばれた、わずかな人のためのものです。しかし、私たちは、殉教者精神、殉

教者の熱情、殉教者のもった献身の態度をもつべきです。すでに、キリストに生命を献げた者として、一人一人は生きるべきです。

十三、ほんとうの弟子への報い

主イエスキさまのためにささげられた生涯は、それ自体、大きな報いとなります。キリストに従う人生こそが、真の意味で人生です。そこには喜びと楽しみがあります。主はくり返して言われました。

「わたしのために自分のいのちを失う者は、それを見いだすのです。」

事実、主のこの言葉は四福音書の中で他のどの言葉よりもくり返し出てきます。(マタイ一〇・三九、一六・二五、マルコ八・三五、ルカ九・二四、一七・三三、ヨハネ一二・二五参照) なにゆえ、そんなにくり返されているのでしょうか。それは、クリスチャン生活の基本原則の一つ、つまり、自己のために握られたいのちは失われるが、主のために注ぎ出されたいのちは見出され、救われ、喜ばれ、永遠に保たれることを表わしているからではないでしょうか。

中途半ばなクリスチャン生活は、みじめな状態になることしか保証できません。主のために

完全に献げることが、主のすばらしきを喜ぶ一番確実な道なのです。

ほんとうの弟子になることは、イエス・キリストの奴隷となることであり、主への奉仕は完全なる自由を与えるという真理を見出すことなのです。私は主人を愛する。主人から解放されることを願わない」ということができる者すべての歩みには自由があります。

弟子はささいな事柄や、過ぎ去って行くものにかかわりあうことはしません。永遠の事に關与し、ハドソン・テラーのように、氣を遣うものがわずかしかないという贅沢を楽しむのです。

弟子はかくれた存在ですが、よく知られているのです。つねに死んでいるようであるけれどもたゆみなく生きています。罰せられはしますが、殺されません。悲しみの中でさえ、喜んでいきます。自分自身は貧しいのですが、富を生みだします。自分では何も持っていないのですが、しかし、すべてのものをもっていきます。(コリント第二、六・九—一〇)

そして、もし、ほんとうの弟子の人生がこの世界でもっとも靈に満ちているものと言えるならば、同じ位に、それが来たるべき世において、もっとも多くの報酬が与えられるものであるということができません。

「人の子は父の栄光を帯びて、御使いたちとともに、やがて来ようとしているのです。その時には、おのおのその行ないに応じて報いをします。」(マタイ一六・二七)

それゆえ、この世と永遠において、真に祝福される人はボードン・エールのこの言葉を共に告白できる人です。

「主イエスさま。私は自分の人生に関する限り、両手をはなしました。私の心の王座にあなたをお迎えいたします。私を変え、聖め、用いてください。あなたのお望みになるとおりに。」

(完)

(本書における聖書の引用には、日本聖書刊行会の許可を得て、新改訳聖書を用いました。)

True Discipleship

William MacDonald

1962

WALTERICK PUBLISHERS

は し が き

この小冊子は、新約聖書に示されている弟子のあり方を明らかにしようとしています。ある人は、そのあり方をみ言葉を讀むことにより、以前から知ってはいますが、複雑な時代である今日、それはあまりに極端すぎて、実践できないものと、決めこんでいます。そして、まわりの靈的に冷えきった状態にひたりこんでしまっています。

私たちはある若いクリスチャングループに出会いました。キリストが語られた弟子としての条件は、すぐれて実際的であるばかりか、全世界伝道への重荷を生み出す唯一の条件であることとを、彼らは身をもって示しているのです。

本書はこの若者たちに多くを負っています。彼らは、この本に明らかにされている多くの教えの生きた見本を示してくれるからです。

これらの教えは、私たちの個人的経験の範囲をこえたものです。私たちは、心の切なる求めとして、これらを明示します。

ウィリアム・マクドナルド